

1. はじめに 長濱ねると図書館
2. 続巻の刊行
 - 2-1. 『図書室のバシラドール』
 - 2-2. 『司書のお仕事2 本との出会いを届けます』
3. 2020年の図書館小説
 - 3-1. 『お探しものは図書室まで』
 - 3-2. 『教室に並んだ背表紙』
4. 関連図書
 - 『図書館の子』
 - 『図書館B2捜査団』
 - 『ふたご探偵5 からくり図書館の謎』
 - 『仕事に必要なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』
5. おわりに

1. はじめに 長濱ねると図書館

2020年3月16日、NHK-FMの番組『ゆうがたパラダイス』で、『日本十進分類法(NDC)』について解説する音声流された。この日の出演者のひとりで、アイドルグループ「日向坂46」のメンバーである「宮田愛萌」が、トークのテーマとして、大学で学んでいる「司書課程」の中で扱われている「NDC」を選択し、その規則について、スタジオに実物を持ち込んでいると思われる状況で、他の出演者に説明していた。1)

「日向坂46」は、2019年に「けやき坂46 (ひらがなけやき)」から、改称されたグループだが、「けやき坂46 (ひらがなけやき)」のオリジナルメンバーで、兼任を経て、「櫻坂46」の専任となり、後に芸能界から離れていた「長濱ねる」は、2020年7月、テレビ番組『7 RULES セブンルール』(以下、本文では『セブンルール』と表記)で、芸能界での活動を再開し、その後も、様々なメディアで、情報を発信してきている。2)

長濱ねるは、幼少期の状況に関して、「家の外で遊び回ることもありましたが、それよりも図書館で過ごす時間が圧倒的に多かったです。比率でいえば、図書館で本を読むのが9割、自然のなかで遊ぶのは1割くらい(笑)。4、5歳のときから図書館に通って、絵本や児童書を読んだり、紙芝居を借りたりしていました」「引っ越して島を出てからも、自宅から徒歩1分ほどの場所に図書館があったので、放課後になると自然に足が向いていました。司

書の先生とも仲良くなって、お薦めの本を教えてもらっていましたね」と、ひんぱんに図書館を利用していたことを、語っている。3)また、長濱ねるが幼少期を過ごした、長崎県新上五島町では、長濱ねるに関係のある場所を紹介した「ねるちゃんマップ」が作成されており、それが地元の新聞や、全国紙にも取り上げられている。4)

長濱ねるは『セブンルール』で、芸能界へ復帰した後、さまざまなメディアで、インタビューや記事に登場しているが、その中で、読書や図書館について、ふれているものが、多く見られる。

『セブンルール』への登場と時を同じくして、『オリコン』に発表されたインタビューでは、「この番組の出演者で印象に残っている人は？」という質問に対して、長濱ねるは、「書店員の新井美枝香さん」「自分が書店員に憧れているので、新井さんを通して本屋の裏側を知ることが出来ました」とこたえ、「番組に取り上げてほしい職業は？」に対しては、「図書館の司書さんとか、すごく興味のある職業なので気になりますね。島根県で『島まるごと図書館構想』というプロジェクトに取り組んでいる女性の方のインタビューを読んだことがあって、もっと知りたいです」「本屋さんや図書館などの職業はもちろん、作家さんとか文章を頭で考えていることを言葉にしている人は、どんな風に物事を捉えているのかということが気になります」と回答している。5)

テレビ情報誌でのインタビューでは「長濱さん自身、ぜひ紹介してもらいたい方や職業って、何かありますか？」という質問に「職業では、図書館の司書の先生もどういう仕事をしているのかとか、どういう生活ルーティンなのかとか、すごく気になるので、見てみたいと思います」と回答している。同じインタビューの後半では、「ここ最近はコロナ禍のなか、なかなか自由が効かないと思いますが、コロナ開けにプライベートでやってみたいことはありますか？」「まさか世の中がこんな状況になるなんて想像していなかったもので、やりたいことは後回しにせずに、やりたいときにやっておくべきだなと改めて実感しました。コロナ禍が落ち着いたらやってみたいのは世界の図書館や本屋さんを巡ること、最近は図書館図鑑を読みながら、いろいろ思いを馳せているところです。特に気になっているのが、ブラジルの王立ポルトガル図書館。4～5年前に知ったのですが、本当に魔法学校の図書館みたいな感じで、壁一面に本が並んでいて、『なんだ、ここは！？』ってすごく憧れています」「では、お仕事で今後挑戦してみたいことは？」「作家さんにお会いしてお話を聞いたり、自分も何かしらの文章を発信したりするお仕事に興味があって。あとは、小さい子に児童書をお薦めするお仕事もしてみたいです」「絵本の読み聞かせなんて、長濱さんに合っている気がしますか？」「本当ですか？　うれしい、ぜひやってみたいです(笑)」という対話をしている。6)

また、今後の活動として考えている方向性について語る中で、「今はコロナの影響で実現できそうにないですけど、いずれ、世界中の図書館を回ってみたいと思っています。幼い頃は、共働きの両親が仕事場から迎えに来るまで図書館の司書さんにお世話になっていたし、当時から児童書を読むのも好きで。オフの時間にネットで調べているし、世界各地の図書館

を紹介する図鑑も持っているんです」「特に憧れているのは、ブラジルの『王立ポルトガル図書館』ですね。ハリー・ポッターに出てくる魔法学校のような空間で、壁一面に本が並んでいる画像を4~5年前に見つけたとき『なんだ、ここは！？』と思って。なかなか簡単に行ける場所ではないんですけど、いつか足を運んでみたいです」「25歳になっても現在のようにお仕事を続けながら、人間としていろいろなことを吸収できていればいいなと思います。とにかく昔から本が好きで、今でも、オフのときは図書館で過ごしたり、古書店街で古本をめくりながら『誰が読んでいたんだろう』と思い浮かべたりもしています。そんな気持ちもあるから、地元の人たちが気楽に入ってこられるような素朴でシンプルな本屋さんに行き、児童書などいろんな本を読んで過ごせていたらいいなと思います」と語り、「世界中の図書館を回ってみたい」として、ここでも「王立ポルトガル図書館」をあげている。7)

さらに『モデルプレス』では、「今後について、近い将来の展望、そして夢」として、「作り手さんに興味があるので、いろんな作家さんやクリエイターさんとお会いして、お話を聞いてみたいです！もっともっといろんな知識や経験を広げていけたらなと思っています」「地元の長崎が好きなので、地元で貢献したいという気持ちは今も変わらないので、長崎県に関わるお仕事もたくさんしたいです」「私は幼い頃にたくさん読んでいた児童書が大好きなので、目標は児童書にまつわるようなお仕事もしたいです。子供たちと関わっていられたら嬉しいです」と語っている。8)

ラジオ番組では、2020年9月に、長濱ねると時を同じくして『セブンルール』に出演し始めた、「クリープハイプ」の「尾崎世界観」がパーソナリティをつとめる、TBSラジオ『アクション』に長濱ねるがゲストで出演し、以下のような会話を交わしている。

尾崎：「長濱さんは読書が好きなんですよ。子供のころからですか？」

長濱：「そうですね。図書館にあった児童書が大好きでした。」

尾崎：「ほかに好きなジャンルは？」

長濱：「ミステリーも読みやすくて好きでした。」

(中略)

長濱：「児童書は今読み返すと、実は大人っぽい内容だったりしますね。」

(中略)

長濱：「『マチルダは小さな大天才』という本ですね。ロアルド・ダールというイギリスの児童文学作家が好きなんです。マチルダは5歳で図書館の本を読み切る天才なんですけど、それに憧れて私も図書館の本を読み切ろうと思ったりしました」

長濱ねるは発言の中で、『マチルダは小さな大天才』に言及し、図書館の本をたくさん読んだというエピソードが語られている。9)

雑誌『BRUTUS』に掲載された、平野沙季子との対談では、「昨年櫻坂46を卒業し、再始動した長濱ねる」「7 RULES にレギュラー出演中」と紹介され、「さくらももこさんのエッセイ」や星新一『ボッコちゃん』にふれたあと、

平野「先生が両親に『平野さん、いじめられてるかもしれません』って」

長濱「私もそのタイプでした。両親が共働きで、放課後は図書室に通っていたんです」

平野「図書室……似合い**ます（泣）」

長濱「だから、休み時間の1人読書、すごく共感します」

というやりとりをしている。10)

さらに、長濱ねるは、『ダ・ヴィンチ』にエッセイ「夕暮れの昼寝」を連載し「文章に加え、写真、題字も自らてがけて」いる。11)また、雑誌『GINZA』には、「小川洋子作品についての文章」を發表している。12)

冒頭に紹介した「宮田愛萌」や「長濱ねる」は、図書館や「司書」に関心を抱いていることを折りにふれて語ってきており、2020年には、それが、さまざまなメディアで発信されていた。13)

注)

1)下記の「日向坂46公式ブログ」で、この件について、ふれている。

「宮田愛萌 公式ブログ 2020.3.18」

<https://www.hinatazaka46.com/s/official/diary/detail/32949?ima=0000&cd=member>

以前の誌では、宮田愛萌がテレビ番組で、MCのお気に入りのコスプレをする回で、「図書館の司書さん」をテーマにした衣装で番組に登場したことや、読書・図書館に関する情報発信を行っていることを紹介した。

佐藤毅彦「2019年の図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.67、2020.3、pp.23-24

2)『7 RULES セブンルール』番組ホームページ

<https://www.ktv.jp/7rules/>

長濱ねると図書館とのかかわりについては、本誌でもふれてきている。下記の論考では、「ゆくゆくは地元に戻って、図書館で働きたいなと思っています。老後とかに。本が好きなので」と、自らの写真集に関して、出身地の長崎で行われた、記念イベントの会見で発言したことなどを紹介した。

佐藤毅彦「図書館の雇用形態の多様化は、フィクションの作品の中でどのように扱われているか——事例研究『みさと町立図書館分館』『図書館は、いつも静かに騒がしい』を中心に」『甲南国文』vol.65、2018.3、pp.1-2

この写真集については、新上五島町のホームページでも、以下のように紹介されている。

「長濱ねる様写真集『ここから』が『九州魅力発掘大賞』特別賞を受賞しました！」

https://official.shinkamigoto.net/goto_culture_full.php?eid=03300&r=2&wcid=j00001x2

3)「長濱ねる 遠藤周作『沈黙』の思い出」『WEB Voice』2018.10.11

<https://shuchi.php.co.jp/voice/detail/5627?p=1>

「本稿は『Voice』2018年11月号、長濱ねるさんの「読書は『心の休憩』」を一部抜粋、編集したものです」とされている。

4)「ねるちゃんマップ」

<http://tomocchi.nagasaki-tabinet.com/wp-content/uploads/2019/02/61c1dd2b36169c8af491a2e4c05ff297.pdf>

「ねるちゃんマップ」の紹介記事 『西日本新聞』 2018.9.24

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/451950/>

「長濱ねるさん撮影で脚光 ロケ地紹介のマップで島おこし」『朝日新聞』 2020.2.23

<https://www.asahi.com/articles/ASN2Q6VRDN2DTOLB00M.html>

5) 「長濱ねる 『素直にやってみたかった』 尾崎世界観と『セブンルール』 新キャスト加入」『ORICON NEWS』 2020.7.7

<https://www.oricon.co.jp/news/2166369/full/>

「島まるごと図書館構想」は、島根県隠岐郡海士町の図書館構想で、「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー2014」で優秀賞を受賞している。

<http://www.town.ama.shimane.jp/kurashi/guide/10600/post-81.html>

6) 「長濱ねる、仕事に対するマイルールと今やりたいこと 『素直に生きていくのは難しいけど、すごく大事』」『ザ・テレビジョン』 2020.9.24

<https://thetv.jp/news/detail/244126/p3/>

<https://thetv.jp/news/detail/244126/p4/>

7) 「長濱ねる、今後の活動への思い 『作り手さんとしてのお仕事も柔らかくやっていけたら』」『エンタメの「今」がわかるクランクイン!』 2020.9.8

<https://www.crank-in.net/interview/80546/2>

「王立ポルトガル図書館」については、たとえば、以下の記事で写真が紹介されている。

<https://www.travel.co.jp/guide/article/18071/>

<https://rtrp.jp/articles/49044/>

<https://www.tbsradio.jp/517032>

8) 「長濱ねる、活動スタートの理由と今後の目標 『セブンルール』で新たな刺激も」『モデルプレス modelpress』 2020.8.18

<https://mdpr.jp/interview/detail/2187444>

9) 「『実はふざけるの大好きなんですよ』 エッセイから垣間見る、長濱ねるの素顔」『TBS ラジオ ACTION』 2020.9.9

<https://www.tbsradio.jp/517032>

10) 「平野紗季子と長濱ねるの散歩論。」「街歩きもご飯も1人に限る? 初対面の2人が意気投合。」『BRUTUS』 2020.9.15、p.100

11) 『ダ・ヴィンチ』10月号より長濱ねるのエッセイ連載がスタート「ダ・ヴィンチニュース」 2020.9.1

<https://realsound.jp/2018/04/post-181472.html>

12) 「GINZA 11月号 編集長からのメッセージ 『本のおしゃれ虫になるGINZA読書案内』」『GINZA』 2020.11

<https://ginzomag.com/thisissue/fromeditors-2020november/>

この件に関しては、以下のコメントも発表された。

「高 3 の時図書室にあったGINZAを見ながら、いつか出れるように頑張るね、と友達と会話をした。4年近く経って、今月号初めて出させて頂いています」

「長濱ねるが高校時代の夢実現『このお仕事ってすごい。もっと頑張るぞ』『東京スポーツ』2020.10.25

<https://www.tokyo-sports.co.jp/entame/news/2334213/>

13)下記の『文春オンライン』の記事では、「夢である図書館司書になる勉強をするために4月からは大学にも通い始めるなど、新たな生活をスタートさせていた」とある。

「元欖坂 46・長濱ねる『空白の1年』の真実 人気バンドボーカルと『結婚前提の真剣交際』そして…… 突然のグループ卒業から1年で芸能界復帰。彼女に何が起きたのか？」

『文春オンライン』

<https://bunshun.jp/articles/-/40827?page=5>

2. 続巻の刊行

2020年には、図書館や図書館員を扱った小説ということで、本誌でも取り上げた作品の続巻が刊行される例がみられた。

2-1. 『図書室のバシラドール』

竹内真は、かつて『図書室の水脈』1)で、図書館や図書館員が登場するストーリーを発表しているが、その後、学校図書館を舞台に、司書資格は持っていないが、学校図書館の業務を担当する職員「高良詩織」をメインキャラクターとして取り上げた作品、『図書室のキリギリス』(2013)、『図書室のピーナッツ』(2017) 2)を刊行し、2020年には、その続巻にあたる、『図書室のバシラドール』(2020) 3)が、発表された。

◎司書講習

直原高校の図書室に勤務している、高良詩織は「三十代にして、また大学の門をくぐるなんて」(p.5)と感じながら、「大和学院大学通信教育部図書館司書課程・情報資源組織演習・東京会場スクーリング第一回」で、司書講習のスクーリングを受講する。受講生は「七割くらいは女性で、ちらほら見かける男性は二十代から三十代が多いようだった」(p.9)という。

「情報資源組織演習」の授業を担当する「山淵という老教授」は、『情報資源』というのは図書館の現場でいうところの『資料』のことです。最近図書館資料も多岐にわたっておりますが、小規模な図書館や図書室でいったら主に『本』のことです。そして『組織』というのは、その資料を探す仕組みを作ることです。ですからこの授業、『情報資源組織演習』を平たくいえば『本を探す仕組みを作ってお稽古』ということになります。そうか、これか

らみんな、本を探す仕組み作りを稽古するのか、そんな風に思えば恐れることはない」(p.11) それでも、難しい言葉を使うのは、「様々な形の資料に対応できる司書になるには、やはり『情報資源組織』という用語を使う学問のほうが便利かもしれんということになります」(p.12) 「国会図書館はもちろん、小中高校や大学の学校図書館でも、地域の図書館でも使いたいよね。いや一般企業の資料室だって、公民館や老人ホームの本棚だって構わない。仮に図書館関係で働かなくなつてね、情報を探す仕組み作りを体得しておれば、これからの情報社会に役立つないわけがないのです。学問というものは、しっかり修めていけば応用がきく、どんな場所に行っても役立つものなんです」(p.13) と言って、図書館資料の目録作りという話から、件名や分類記号の付け方を講義していく。「司書になるのが狭き門というのは国会図書館に限った話ではなく、公共図書館の採用試験には全国各地から司書の有資格者が集まって、何十倍とか何百倍という倍率になるらしい」(p.13) というように、図書館の正規職員の採用についての状況についても紹介されている。

高良志織は、直原高校に雇われているが、「来年度からのことは何も決まっていない」「今後も図書館の仕事を続けていくためにもしっかり勉強して資格を取っておきたかった」(pp.13-14) ということで、講習に参加している。

実在の本を使った演習で、詩織は教授に指名されて、なんとか回答するが、新着本の分類は、「ネットで調べて誰かがつけた分類記号を写すのが習慣になっていた。公共図書館ならプロの司書がきちんと分類したデータがあるし、今は新刊が出た時点で MARC と呼ばれるコンピューター用の目録データがついている。それを使えば間違いないと思っていたのである。そうやって楽をしていたものだから、学問と現場の仕事が結び付かなかつたのかもしれない」(p.17) と感じた。講習で知り合った女性に、今は高校の図書室で働いているが、「一年契約」で、「任期付採用職員」なので「長くても五年までらしい」「二年ごとに異動になりやすい」(p.20) などと話している場面もあった。

◎前任者の永田さんとの会話

直原高校図書室の前任者である「永田さん」との会話では、不合格となって書き直した「図書館情報技術論」のレポートについて、詩織は「図書館を利用した経験を踏まえて情報技術の活用のされ方と改善点について述べよ」という課題に、直原高校の図書館のことを書いたところ、「『実体験から学ぶのは大切ですが、個人的な後悔に終始せず、目指すべき図書館像を踏まえて学問的に考察しましょう』なんてダメ出しされちゃった」と話すと、永田さんは、「『それって、現場を知らない学者先生のコメントよね。毎日の仕事に追われる学校司書は、学問的に考察してる暇なんかないってのよ』」と発言する。詩織は、「『一応、言われた通りに書き直して再提出しましたよ。情報セキュリティ度の高い学校図書館、とかいって』」(pp.23-24) とこたえている。

その後、会話の中で、『マガーク探偵団』について、日本では、「ハードカバー文庫」「復刻のソフトカバー」「新書サイズ」の三種類出ていることが話題となる場面がある。

このシリーズの『あやしい手紙』4)について、永田さんは「『すごく面白かったのよ。子どもたちの探偵団が、小さな手掛かりから本物の犯罪計画に立ち向かうのにわくわくして、で、ネットで検索して、いろんな読者のレビューを眺めてみた』」ところ、基本的には好評だったが、『あやしい手紙』を批判して、「『最近このシリーズの復刻版が出ているが、『あやしい手紙』は出さない方がいい本だ、復刻はやめてもらいたい』」とブログに書いている人がいたという。その理由は「『本の中に出てくる図書館員のせい』」で、「『図書館員のお姉さんに聞き込みをして、前にその本を借りた人を探るってシーンがあって』『そのブログ主は大学で資格として司書の仕事してる人みたいなんだけど』『まともな教育を受けたプロの司書であれば、図書館利用者の個人情報を探偵ごっここの子どもに明かすなんてありえない!』」と書かれていて、「『そのブログを読んでもうちに、自分が責められてる気がして』『司書として図書館利用者の個人情報を漏らしちゃいけないのは分かるわよ。でもそれは働く側が気にしてればいいことであって、そういうエピソードが出てくる本まで否定することないじゃない。そのあたりが雑な時代もあったんだし、ちょっと不心得な図書館員が出てきたからその本を否定するなんて、そっちの方がありえないわよ』」と言い、復刻版は、「『その章の終わりに注釈がついて、図書館の情報セキュリティーを説明するってことで解決してあるんだって』」(pp.25-27)と述べている。

さらに永田さんは「『取り締まり感覚で本を否定したがる人って結構いるのよ』『物語の中にまで過剰反応しちゃってるのよね』『図書館員の倫理観にだけ目くじら立てるのって変じゃない?』『貸出履歴が漏れちゃうような図書館も嫌だけど、『あやしい手紙』の復刊に反対するような——自分の倫理観で本を取り締まるような司書のいる図書館はもっと嫌だって』『司書は接客も仕事なんだから、個人情報だの守秘義務だのってことより、臨機応変の対応が優先に決まってるじゃない』『自分の中に持ってるや立派な倫理観でも、周りに押し付け始めたらただの迷惑になっちゃうってことよ。そりゃあ図書館学を学ぶのも資格をとるのも結構だけど、その知識や倫理を杓子定規に振り回して、本や利用者を取り締まるような司書にはならないでね。図書館は本や利用者のためにあるはずのもんで、司書のためにあるわけじゃないんだから』」(pp.28-29)と語っている。これらは、高良詩織の発言ではなく、詩織は永田さんの発言に、全面的に同意しているとは書かれていないが、とくに、永田さんの発言を否定するようなコメントもしていない。

のちに、詩織は、図書館実習に赴いた、市立図書館のカウンターで、氷室冴子の文庫本を借りようとしている高齢の男性利用者に遭遇した際に、学校司書の先輩である、永田さんなら「笑顔を向けて『かわいらしい本を借りられるんですね』などと声をかけ、楽しく世間話をできるのかもしれない。彼女だったら『貸出情報は利用者のプライバシーだから秘密厳守』みたいな倫理観は軽々と乗り越え、それでいて角が立たないように立ち回れそうな気がする。しかし詩織には、そんな度胸も要領の良さもない。おとなしくカウンター業務に励み、貸出手続きを終えて『ありがとうございました』と声を掛けた」(p.108)という体験をしている。

また、詩織が参加しているスクーリングで、分類の話題から、永田さんは、『赤木かん子の図書館員ハンドブック 分類のはなし』について、『『NDC やら MARC やらに縛られずに、その上をいっている』『学校図書館、特に小中学校は NDC の分類だけじゃ不便だっことで、自分なりのイラスト分類シールを作って、子供でも一目でわかるようにしちゃった』その実例が載っている本で、『これこそ学問とは違う現場の力』『学校司書に必要な臨機応変力だ』『NDC みたいな分類の秩序も大事だけど、秩序よりも大事なのは心でしょ』(p.31) と、詩織にプレゼントする。

◎生徒の貸出履歴をめぐる保護者への対応

夏休みに、生徒の一人が自転車で旅に出て、保護者と何日も連絡がつかない事態が発生する。この生徒が、夏休み前に、借りていた本を学校図書館に返却していることから、詩織は、「地学教師の東田先生」に『『その時に、返したのはどんな本でした』『何か、手掛かりになるかもしれない』(pp.34-37) と尋ねられる。「どんな本かは覚えていたし、この図書館のシステムにも履歴が残っているはずだ」が、「大隈君の個人情報だ。詩織の一存で明かしていいものだろうか?」と考える。「多分、大隈君本人は気にしないだろう。だけど詩織は気にする。いや、気にかけるべきだと決めたのだ。それは自分への戒めみたいなものだった」「以前の詩織だったら、何も考えずに口にしていただろう。でも今は違う。まだ資格はとれていないけれど、司書資格を目指して図書館学を勉強している身なのだ。貸出履歴の漏洩は学校司書として慎むべきだと思える」(p.38) ということがあった。

このあと、詩織の男性の友人で、市立図書館の司書の山村さんと電話で話した際に、『『ご心配なく。ちゃんとお断りしましたから』『でも、それで平気だった? 事務長さんって一応、詩織さんの上司でしょ?』『上司っていても別に高圧的な人じゃないし——貸出履歴は個人情報ですって原則を説明して、今の時点では学校司書としてご協力できませんって答えたの』先生からは粘られたけど、保護者さんは、無理強いできません、と言って、ほんとうに家出とか事件とかだっけ分かったら、また考えましょう、ということになったと、伝える。山村さんは、『『言わないって選択でよかったと思うよ。何か切迫した事情があるなら別だけど』』と言って、市立図書館では、『『それはお答えできかねます』って対応する』『うちの貸出システムの場合、返却後にまで何を借りたかって履歴は残らない』』と説明する。個人情報だっというのに、なんで直原高校では、『『貸出履歴が残るようなシステムになってるんだろ。別に必要もないのに』』という詩織に対して、「多分……昔の貸出カードの名残じゃないかな? ほら、書名とか借りた人の名前とかを手書きで記入するシステムだと、本のカードには借りた人の名前が残ったし、利用者のカードには借りた書名が残ったから」『『そのころには個人情報の保護意識も低かったんだろうね。大抵は外注でシステムエンジニアとかがプログラムを組むもんだし、学校みたいな組織はなんでも記録に残したがる傾向がある』』と市原さんは、話している。さらに「図書館は成長する有機体である」という、ランガナタンの第五法則を引用して、『『図書館自体に成長しようっていう意識がある

から、悪しき旧弊はだんだんと淘汰される』(pp.39-41)と述べている。市立図書館の司書である山村さんから、図書館でのプライバシーに対する扱いについての歴史的な経緯や、公立図書館と学校図書館との対応の違いなどをふまえた説明がなされている。

自転車で旅に出た生徒は、市立図書館からも本を借り、夏休み前に返却していて、このあと、ある生徒が、市立図書館へ行って、「司書さんに向かっていきなり『友達の借りてた本を調べたいんです』なんて相談して断られたんですよ」という件があったことを、市立図書館に同行した、この生徒の友人から聞かされた詩織は、『『あやしい手紙』の件を思い出さずにはいられなかった』『マガーク探偵団に應對した女性図書館員とは違い、直原市立図書館の司書なら簡単に利用者の貸出履歴を明かしたりはしないだろう』(p.98)と考えた。

◎市立図書館での山村さんによるレファレンスインタビュー事例

先の生徒のインスタグラムに『チャーリーとの旅』とっしょに写っていた『千尋と不思議の町』という本について調べるため、詩織は、市立図書館を訪問する。山村さんに、宮崎駿監督のインタビューのページについて『『このあたりの発言みたいなことを、別の人の本で読んだ気がする』』が、調べられるか尋ねる。山村さんは、さまざまなジャンルや書き手の名前をあげて、レファレンスインタビューを行っていくが、詩織は「そこで唐突に閃いた。思わず声をあげていた。『村上春樹と読者のメールのやり取りの本です』』と思いつく。そのようなテーマを調べやすい資料として、山村さんは『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2011』を紹介している。この一連の対応に関して、詩織は、「図書館利用者の探している資料を見つけるため、聞き取り調査を行って対象を絞り込んでいこう、というのがレファレンスインタビューの基本だった」「実際の現場で鮮やかに決められると感心するしかない」と感じていた (p.73)。

◎図書館実習

「教育実習」「博物館実習」が、教職課程や博物館学芸員課程の必修科目に設定され、「実習」科目の単位を取得しなければ、資格を取得することができないのに対して、現実の司書課程では、「図書館実習」は選択科目である。文部省令で定められている「選択科目」は、5科目あって、その中の2科目を取得すれば、資格が得られることになっており、司書課程開講大学の中でも、「図書館実習」を開設していない大学も存在する。

『図書室のバシラドール』のストーリーでは、「通信教育の選択科目」として、「図書館実習」が開講されており、直原高校の図書室に勤務している高良詩織は、自宅から近く、図書館員と気心が知れている直原市立図書館で、実習をしようと思い、男性の友人である、直原市立図書館司書の山村さんに相談した。すると、山村さんは『『うちも図書館実習の希望者が現れたらまず断りはしないと思うけど』『個人としては、詩織さんがうちの館で実習するのは反対』』と言って、『『ぼくが落ち着かない』『絶対詩織さんを気にしながら働くから意識が散漫になる』『失礼な言い方だけど、詩織さんは、僕に甘えちゃうと思う』『一生懸命なよ

うでいて、時々楽な道を行きたがるところがあるでしょ?』『いけないことだと分かってても、適当にごまかしちゃったりとか』『いざ図書館実習ってなった時に、僕がいるせいで、詩織さんのそういう悪い面が出てきやしないかって心配』(pp.114-115) という理由をあげる。詩織は、反論できなくなり『図書館実習っていうのは本来、司書を目指す学生さんが、知り合いなんていない図書館の現場に飛び込んで、実務を経験しておくためのもの』(p.115) と言われて、となりの市である白前(しろまえ)市立図書館で、実習をすることになる。

実習に際して、詩織は、白前市立図書館では、利用者を「お客様」、「お爺さん・お婆さん」ではなく「ご年配の男性・女性」と呼ぶように、「事前に言い渡された。この市立図書館の指定管理者である企業の方で、そういうマニュアルが用意されていた」(pp.107-108) という。カウンター業務で、氷室冴子の文庫本を借りた高齢の男性利用者に対応した後、バックヤードで、詩織は「池田久美という正規の図書館員」で「実習中は、インターンとして働く詩織の担当職員」に『あんた、見すぎだよー。本もお客様も!』『—すみませんでした』と注意される。『最初に言ったでしょ。誰がどんな本を借りるかってことは、お客様のプライバシーにかかわることなの。まじまじ見入るなんてもってのほか』『すみません。……つい目に入っちゃって』『目に入ったとしても、何も見えていないような態度で対応するの。何か思っても顔に出ないようにして、心を平静に保って』その言い方に、くすりときてしまった。我慢しきれずに呟いた。『なんか、お寺の修行みたい』『口ごたえしない!』ぴしりと告げられた。『そういうとこ、学生気分でいられちゃ困るの。言ったでしょ? 公共図書館員に大事なのは、お客様への気働きなんだから』今度はおとなしく頭を下げた」(pp.107-110) という指摘を受けている。

池田久美は、詩織の大学の同級生だったが、同じ友達グループでも、そりが合わない相手だった。「詩織は学業よりも旅行サークルや合コンを中心に生きているような学生だったが、久美は、学業優先で、ほとんどの科目で優をとっていた。社会人になって「自分の図書館実習の指導担当」になったことについて「わが身の不運を嘆きたくなる展開」(pp.110-111) と考える。久美には『私が大学で司書課程の勉強をした頃、詩織って旅行ばかり行ってたじゃない』『ビシビシしごいてあげる』(p.111) 『うちの図書館で、ああいう学生の頃みたいな感覚で仕事するのだけはやめてよね。お客様にも、この図書館のスタッフみんなにも迷惑がかかるから』(p.113) と言われる。

カウンター業務の実習で、久美に、忙しい時はヘルプを呼ぶように告げ、『大事なのはあなたがどう思うかじゃないの。利用者視線で—お客様に向けて配慮するってことなのよ。返却にきたカウンターで、高良さん一人があたふたして待たされたってイライラするだけでしょ』と言われるが、「詩織としては納得いかない話であった。一人で抱え込むなという前に、そもそもインターンの詩織一人がカウンターに残された事態の方が変なのだ。むしろ指導担当職員の責任ともいえるんじゃないかと言いたくもなる」(p.116)。「そのあたりは、直原高校の図書委員と学校司書の関係に似ている気がした」。「『学校司書だったら、一人の職場で好きなペースで仕事しちやえるのかもしれないけど』『普通の図書館の仕事は他のス

スタッフと連携してるものなの』と久美に言われ、「直原高校の司書室では詩織が自分で判断しないと仕事が進まないことが多々あるけれど、この市立図書館ではそうじゃないのだ」(p.117)と詩織は考える。カウンター業務について、「高校は良くも悪くも閉鎖社会だし、やるべき仕事も限られているから一人で判断もしやすいのだ。その点、白前市立図書館では仕事も多岐にわたる」という中で、詩織が、返却ポストの本の返却作業をしていると、カウンターの職員が利用者カードを新規で作りたいというお客様に対応することになり、同時に、返却にきた別の利用者に対応して作業していたところへ、レファレンスにお客様がきて対応しようとしたら、注意されることになった (p.118)。

実習の期間中に、館長の春日さんに、『『どうです、仕事の調子は？』』と声をかけられ、『『実はね、心配してたんです。高良さんは現役の学校司書ということで安心して受け入れられたんですが——指導担当が、少々厳しいようだから』』『はい……いえ、勉強になってます』』(pp.130-131)と回答しているシーンもあった。実習期間の恒例として、インターンに『サービスタイム』があり、『『実習最終日は、この図書館の仕事の中で一番やりたい業務についてもらうことになっている』』『図書館の仕事を好きになってほしいという狙い』』ということで、選書や廃棄の決定などは任せられないが、それぞれの業務担当者の下で働いてもらうと言われ、詩織は「本の装備や補修の業務を希望」(pp.131-132)する。

実習期間の最後に、職員一同に挨拶した後、池田久美に『『いろいろ厳しくしちゃったけど、詩織はよくやってたと思うよ』』『私の厳しさなんか、図書館に就職して働いていく上での厳しさに比べたら、全然大したことないからね』』『実際に図書館で司書になるのはもっとはるかに大変なの。これから司書資格をとれたとしても、それで人生安泰みたいには考えない方がいいから』』と言われ、『『私はまず、今の職場の図書室でいい仕事をするために、勉強して資格をとるの』』『任期が切れた後も図書館の仕事に就けたら嬉しいけど、司書資格がそのパスポートとは思ってない』』(pp.139-140)と、詩織は話した。

◎ビブリオバトル

去年の文化祭では図書委員会の企画でブックトークを実施したが、今年は、ビブリオバトルはどうか、と生徒から提案される (p.144)。司書教諭の若森先生は、生徒の自主性に任せとておくのが一番で、『『ネットで調べてみたんですよ。世間じゃビブリオバトルの評判はどうかになって』』『楽しくやってる子もいる一方で、嫌がってる中高生もいました』』。クラス単位、学年単位、学校単位でとりくんでいるところもあり、『『いついつまでに本を読んで発表内容を考えてこい、みたいに、全員に強制するところもあって』』『もともと本なんて読まない子も結構いますからね。そんな子に強制したって、単に面倒な宿題が増えたようなものでしょ』』『やっぱり自主性って大事ですよ』』『ビブリオバトルもゲームとして楽しいってのがまずあって、自分も出たいから本を読む、紹介が面白そうだから読む、勝ちたいから面白い本を探すってのが理想でしょうね』』『なんか面白そうなことやってるってなれば、放ついても人は来るってことでしょね』』(pp.202-203)と、話している。このあとでは、ビブリオバト

ルをめぐる様々な状況が、実際に取り上げられる本の詳細な紹介も含めて詳しく描写されている。

◎司書資格

「すべての科目の試験に通り、司書資格に必要な単位を取得できたのは昨年末」「二〇一四年のお年玉」みたいなもの、と記述されている。巻末には、「初出 双葉社文芸Webマガジン「カラフル」二〇一九年三月一〇日～一〇月一〇日」と表示されており、ストーリーの中で、あえて、物語の舞台となっている年代をはっきり示しているのは、のちに扱われている、学校図書館法の改正、との関連があるものと思われる。

直島高校の校長先生に、司書資格を取得することができたことを報告し、それを直島高校の図書館で生かしたいと『来年度もこちらで雇っていただける希望はあるでしょうか?』『学校司書は一年契約だし、大抵は二年くらいで別の学校に異動になると着たものですか』『たださえ任期付採用で五年までしか働けないのに、二年で異動しちゃったら中途半端になると思うんです』と詩織は、話している。それに対して校長は、『いいか悪いかはともかく、任期付採用職員が五年まで、一年ごとに契約というのは直原市の決めた制度です。私も口を出せません。しかし、学校司書が二年ごとに異動というのは決まり事ではありません。いつの間にかそうなった、慣例みたいなものです』『しかし、慣例になるのはそれなりの理由があるからでしょう。それを無視してかかるわけにもいかない』と言って、個人的な推測だが、長く同じ職場にいると偏りが出るかも知れないので、一定期間で異動することは、慣れ合いを防ぎ、緊張感を保つため異動は悪いことじゃない、といった後、『組織として、様々な形の雇用で様々な人に働いてもらうことにも利点はあるし。異動した人は様々な職場での経験を積める』『問題があるとしたら——そういう慣例が形骸化して悪い結果を生む場合です』と言うと、詩織は、『ですから私、前任の永田さんの話を聞いて、それは良くないと——』『来年度もここで働けるのを目指して頑張ってきたんです。こうして資格もとれて、これからもっとこの図書室をよくしたくて——』と話している。校長は、『高良さんの気持ちは十分に分かりました。ちゃんと頭に入れておきます。しかしその件は、この場で私の一存で返事のできることでない。いろんな要素が絡んできますし、今は少々微妙な時期でもあるから——』『今現在、新しい流れもあるようですね』と言っているが、それ以上くわしいことは、ここでは述べられない (pp.263-264)。

◎教員との連携

司書講習の「図書館制度・経営論」で、「図書館の専門職が行う業務の具体例を挙げ、これからの図書館と司書のあるべき姿を論ぜよ」というテーマのレポートで、詩織は「学校図書館は学校行事や授業内容に合わせ、図書館資料を活かした授業支援を行うことができる。その際、専門職としての学校司書には、学級担任や教科担任と連携して資料の選定を行い、図書館の効果的な利用方法を提案することが望まれる。司書教諭と学校司書の連携はもち

ろん、教職員全体と学校司書との協働がうまくいった時にこそ、学校図書館が十分に機能するはずである」(pp.279-281)という文章を書いていた。これを机上の空論に終わらせず、現実に活かしていくことを考え、その実例として、授業にビブリオバトルを取り入れてみたいという教員に、詩織は、生徒と一緒に企画してみてもどうかと提案している(pp.281-285)。また、『学科や学年の枠を取り払って、いろいろな先生方の専門分野でブックトークをしてもらおうって企画』の「ランチタイム講演会」の企画書を、司書教諭の若森先生に提案し、それを実現させていく(pp.287-290)。

◎雇用の継続と「学校図書館法」改正

その後、詩織は校長室に呼ばれて、『まだ内々の話ですが、来年度も高良さんに契約をお願いすることになりました。司書枠でなく、事務員枠での一年契約ということで、待遇が変わらないのは申し訳ないんですが』と告げられる。詩織は『嬉しいです』と応え、「待遇がいいに越したことはない」「まずは直原高校の図書室で働き続けることが先決」と考える。(pp.324-325)。

さらに、小説自体のラストシーンでは、校長が、官庁に勤めた後、衆議院議員になっている友人が「子どもの未来を考える議員連盟」に関わっており、その総会で協議された、学校司書の法制化についての資料を、詩織に提示する。資料は「学校図書館法の一部を改正する法律案(仮称)骨子案」と記されていた。校長は、『司書教諭の役割や配置については現行の学校図書館法に明記されています。しかし高良さんのような学校司書についての記載はない。そのせいで、配置の有無や雇用の正規非正規などは自治体ごと、学校ごとにばらばらなのが現状です。多くの学校関係者が改善を訴えてますし、国会議員や文部科学省も実態調査に乗り出しました。私のところにも調査依頼がきて、その縁で旧友の議員と連絡を取り合うようになったんです』『近いうちに、超党派の国会議員から具体的な法改正案が出されて、国会で審議されるそうです。各種の調整はあるでしょうが、何らかの形で学校図書館法が改正される見込みなんですよ。二〇一四年成立なら、二〇一五年から施行となるかもしれません』『二〇一五年施行となれば、学校現場に反映されるのは早くとも来年四月、再来年度です。変革には時間がかかりますね。しかし、それでも希望を見出そうじゃないですか』

『学校司書の法制化へのゆっくりとした流れ、それを柔軟に考えてみましょう。そうすれば、来年度からできることもあると思うんです』『正直言って、二〇一四年度はまだ、待遇改善は約束できません。しかしその先、学校には専任の学校司書を置くべしということになるかもしれない。そうなったら、学校司書は図書館業務について専門性を持った人材が望ましいに決まっています』『もちろん現時点では希望的観測ですがね。そんな未来のために、今のうちから備えておくというのも学校経営の長期的展望というものです。来年度も高良さんに、有資格者となった人材に我が校で働いてもらうのは、いざ事態が動いた時の布石になるはずですよ。人事考査でも、そういう意見を訴えました』(pp.329-331)というように、学校図書館法改正への動向と、それに関連した将来的な展望について、語っている。実

際に、学校司書に関する条文が追加され、学校図書館法は、2014年度に改正が公布、2015年度から施行された。また、学校司書モデルカリキュラムが発表され、一部の大学では、運用されている。5)

詩織は、「『来年度は先生方の授業計画と連携していけたら』」(p.331)「『各教科の年度初めの会議に学校司書も出席させていただきたいんです。そこで授業と図書館との連携について挨拶させてもらえたら』」(p.332)と校長に話すと、自分は転任するので、来年度の校長に提案するようにと告げられる。

注)

1)竹内真『図書館の水脈』メディアファクトリー、2004

2)竹内真『図書室のキリギリス』双葉社、2013

竹内真『図書室のピーナッツ』双葉社、2017

3)竹内真『図書室のバシラドール』双葉社、2020

初出 双葉社文芸Webマガジン「カラフル」二〇一九年三月一〇日～一〇月一〇日

巻末には、「本書の登場した本」のリストがあり、5ページにわたって、約70冊が紹介されている。

「バシラドール」について、『図書室のバシラドール』の本文中では、「スタインベックの『チャーリーとの旅』に『バシラドール』という言葉が出てきた」「『バシラドール』という意味の造語らしい。自分自身もバシラドールだ、どこかに着けるかどうかは気にかけずに旅をしている、という含みがあるようだ」(pp.65-66)との記述がある。

「紀伊國屋 BOOK WEB」で紹介されている『図書室のバシラドール』の「内容説明」では、「ノーベル賞作家スタインベックの造語『目的地に急ぐ旅より旅そのものを楽しむ人』のこと」とされている。

<https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784575242614>

4)E. W. ヒルディック、藤沢忠枝訳『あやしい手紙 マガーク少年探偵団』あかね書房、2004

上記『あやしい手紙』の新装版では、この場面を扱った章の末尾 (p.139) に、以下のような注が付けられている。

「注——図書館ではふつう、どの本をだれが借りたかを教えたりすることはありません。そういった個人の情報を教えることは「プライバシー（私生活を他人に知られない権利）の侵害」になるからです」

『あやしい手紙』については、「こどもに厳しいショー夫人に比べて優しいグランオード夫人は、ぼくらの頼みをすいすい引き受けてくれた。『ぼく』がリストを見せるとすぐうなずきながら、せっせとカウンターの後ろの記録を調べてくれるのである」「マガークたちに目録のひき方を教えるのと同じ意識で、利用者の『読書の秘密』を教えている」との紹介がある。出典は、下記。

馬場俊明『「自由宣言」と図書館活動』青弓社、1993、p.103

また、筆者（佐藤）は、
E. W. ヒルディック、藤沢忠枝訳『あやしい手紙 マガーク少年探偵団7』あかね書房、
1979

について、下記の論考の（注）で、以下のように、言及したことがある。

「子どもにはやさしい対応をしているが、利用者のプライバシー保護の観点からは、問題があると思われる行動をとっている図書館員が、読者から見て、好意的に描かれている」

佐藤毅彦「現実の図書館状況を反映したストーリーで、図書館はどのように描かれたか『襲名犯』『図書室のキリギリス』のケースについて—図書館はどう見られてきたか・15—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol. 51、2015. 3、p. 9

5)現実には、以下のような「学校図書館法」の改正が公布された。

「学校図書館法の一部を改正する法律の公布について（通知）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1360206.htm

「学校司書のモデルカリキュラムについて（通知）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1380587.htm

2-2. 『司書のお仕事2 本との出会い届けます』

このシリーズの前作、『司書のお仕事 お探しの本は何ですか？』は、「高校生、司書課程で勉強したり、図書館に就職しようとしている人に対して、『司書の方がふだんされているお仕事の内容を、ストーリー形式でわかりやすく読めるように作ったもの』（p. 2）だと紹介されている内容にそったものだったが、『司書のお仕事2 本との出会い届けます』では、『司書のお仕事 お探しの本は何ですか？』が「たいへんご好評を頂き、このたび第二巻を刊行することとなりました」と、冒頭に記されている。1)

前作と同様に、図書館に特有の用語や概念については、本文とは別に解説のページで説明されている。それには2種類あるが、ひとつは、「目次（pp.4-5）」に、「コラム」として掲載ページが示され、各章の末尾に掲載されている。

第1章「特別整理期間」 pp.68-69 「図書館で司書として働くには」 pp.70-72

第2章「図書館とデータベース」 pp.136-137 「読書バリアフリー法」 pp.137-138 「図書館とゲーム」 pp.139-140 「図書館と地域連携事業」 pp.141-142

第3章「寄贈図書」 p.201 「図書館と生涯学習」 pp.202-203 「図書館での資料保存」 pp.203-204

一方、目次には記載がなく、本文の上または下の部分などに、本文とは別の囲みスペースの中に、記載されているものは、

第1章「除架と除籍」 pp.20-21 「派遣職員と委託業務」 pp.32-33 「ビジネスコーナー」
p.35

第2章「教育行政と図書館」 p.76 「AVサービス」 pp.80-81 「著作権の保護期間と著作

権」 pp.82-83 「国立映画アーカイブ」 p.98 「行政支援レファレンス」 p.115

第3章「神保町の本屋街、東京古書会館」 p.168 「いろいろな装丁」 p.174 「公共図書館の任務と目標」 p.182 2)

である。なお、「おわりに」として、巻末には、「監修」を担当した「小曾川真貴」（表紙カバーには、「犬山市立図書館司書・日本図書館協会認定司書」との記載がある）のコメントがつけられている（pp.205-206）。

冒頭におかれた「はじめに」（pp.1-3）では、先にふれた、続巻の刊行までの経緯が紹介されている他、前作の刊行後の話題として、「図書館」をテーマとした映画、『ニューヨーク 公共図書館 エクス・リブリス』、『パブリック 図書館の奇跡』の公開があげられている。

◎図書館運営センターの委託スタッフ

この小説の舞台である、味岡市立図書館で、司書として働く、稲嶺双葉は、YAの展示について検討している業務中に、「図書館運営センターの委託スタッフ」の「裕美」3)を、事務室へ連れていく（p.25）。「カウンター業務をお願いしている図書館運営センターの委託スタッフが本館と分館をあわせて六十人くらいいる。けれども、三階の事務室に出入りしたり、個々のデスクで仕事をしたりしているのは、チーフと呼ばれている二人だけだ」という状況だったが、YA展示について、裕美に、いっしょに考えようと提案して、先輩の女性職員・山下麻美さんに、『「センターとはカウンター業務以外の委託契約をしていないことくらいは知ってるでしょ？ というか、あなた、センターとの契約交渉担当者じゃない』』と、たしなめられる。図書館の業務を委託している「図書館運営センターの委託職員は、カウンター業務だけを担当することになっている。それは、わかる。けれども、理屈ではわかっているけど、納得できないことはある」（pp.23-29）と、双葉は感じているが、それでは問題解決にならない。

翌日、「裕美が図書館運営センターのチーフをしている榎田さんから叱られているのをみかけた」「裕美が私からの相談を受けているあいだ、本来の仕事である蔵書整理から離れていたのがいけなかった」ということで、榎田さんは、『「委託スタッフには、持ち場がありますので』』と告げる。双葉は、「言いたいことはたくさんあった。けれども、これ以上事態を悪化させても仕方がない。私はただ作り笑いを浮かべて黙っていた」「『センターの委託スタッフはもともと、委託元の図書館の専従職員と直接会話してはいけないことになっているんですよ』『何かご相談がある時は、チーフを通すように言われてませんか？』『あれって、そういう意味だったんだ』『図書館の派遣職員と委託業務との違いですね。派遣の図書館員という扱いなら、派遣先になっている図書館員の人たちの中で働くことになるので、図書館から直接指示を受けてお仕事をすることになるんですが。私たちは委託なので……』』（pp.29-32）というやりとりがある。一般の利用者からは見えにくい、図書館職員の多様な雇用形態と、それぞれの関係性が、具体的な事例を出して、人間関係とともに詳しく描かれている

◎委託スタッフからの展示に関する提案

図書館運営センターの委託スタッフで、チーフの榎田さんから、企画書が出され、「児童書のコーナー」で「動物の本や図鑑、ぬいぐるみ」実物などの展示をしたいという提案が出される。先輩司書・麻美さんは、『センターとはカウンターとの契約しかしてないですよ？館の運営全体を委託しているところならともかく、展示コーナーはカウンターの外ですから』と説明して、提案を断る。センターのホームページで、別の図書館での展示が公開されており、「図書館運営センターの本部が企画をして、図書館をまたいだシリーズ展示として進めている」という事情があり、榎田さんは『本だけの展示ならできると思うんです』と言ったが、麻美さんは『展示のほうは私たちがやりますから。センターの委託スタッフの皆さんは、蔵書点検を予定通り終わらせてください』と言って断ってしまう。双葉は、「私が企画を引き受けますので、一緒にやりましょう！ たった一言、そう口に出すだけでよかったのだ」「それなのに、たった一言が、出てこない」「うちの図書館とセンターの契約上、カウンター以外の業務をお願いしたり、依頼したりすることはできない。それは、わかる。……でも、お互いにもう少し、ゆるやかな関係を作ることにはできないだろうか」「お互いにいろいろな提案をしあって、図書館をよりよく運営していくことができれば、そのほうが良いに決まっている」「図書館とセンターとは、いつもこんな感じなのだ。お互いに最低限のビジネスライクなコミュニケーションをとって、それぞれの持ち場をこなしている」(pp.40-43)と考えていた。

◎多様な雇用形態の職員体制

正規職員の司書以外の職員について、その多様な雇用状況が、実態をふまえて描写されている。

○新田裕美

先にも紹介した、司書の稲嶺双葉と歳が同じで、「図書館運営センターの委託スタッフ」として、味岡市立図書館で、働いている「裕美」は、『図書館運営センターのお仕事が終わったら、夕方からここでアルバイトすることになった』(p.51)と紹介される。「YAに詳しく、図書館運営センターの出勤時間が」「固定されている裕美に」「夕方以降に館長の業務補助をする短期のアルバイトとして入ってもらった」(p.53)ということで、同じ人物が、時間帯によって、雇用形態の異なる働き方をしていることになる。

さらに、その後、「十月に会計年度任用職員の杉沢さん」が辞め、そのあとが補充されない(p.22)という状況に対応するため、「裕美」は、「会計年度任用職員に採用」される。「会計年度任用職員の司書は、専従の司書とまったく同じように、図書館全体の仕事をする。勤務時間は短めになるけれど、時間内なら会議にも出る」「決して給料が良いわけではなく、官制ワーキングプアの温床として批判もされている。もしかすると、図書館運営センターのスタッフをしているときよりも、時間単位の給料は下がるかもしれない」「公務員の会計年

度任用職員は、一般企業でやっている嘱託職員や派遣職員の無期化転換ルールからは外れてしまうけれど、味岡市立図書館では基本的に、特に理由がなければ雇用を継続することになっている。だから、いちおう司書としての立場は守られる」(pp.62-63) ということで、こんどは、雇用形態は、「図書館運営センターのスタッフ」から「会計年度任用職員」に変化しているが、雇用の継続という面ではともかく、収入面での待遇としては、必ずしも、好ましいものでないことが示されている。4)

○榎田さん

図書館運営センターの委託スタッフのチーフである榎田さんは、職員用出入り口の鍵を持つことができる立場にあった。そのことを利用し、退勤時間が夜の十時を過ぎていた件について、主任司書の智香さんから問い詰められる。以前にも同じことがあり、「『今度あったら、図書館運営センターの本社に報告して、御社との契約も含めて検討するということにしていましたよね?』」と言われると、「目に涙を浮かべながら、事情を説明」し、「黒川市の司書採用試験を受けるつもりだったらいい。そのためにこっそりビジネスコーナーに残って、公務員試験の勉強をしていたということだった」『『図書館運営センターの正社員ではなく、契約スタッフですから。どうしても、専従職員の司書になりたいんです』『大学で勉強して、資格は持っているんです。だったら、司書の仕事に求められていることは、どんなことでもやってみたいと思うはずじゃないですか!』』(pp.56-59) と、榎田さんは、発言している。双葉は、「すべての仕事を、一人の司書が請け負うことはできない。どこかで仕事を分けて、それぞれが担当する仕事を決めないといけない」「すべての仕事に携わることができるかもしれない立場と、そうすることが閉ざされてしまっている立場とでは、思うところもきっと違うはずだ」(p.60) と、自分とは異なる立場の雇用者に、思いを馳せている。その後、榎田さんは、別の館で、チーフではなく一般のスタッフになった、ということが明らかにされる (p.63)。

◎市議会議員による視察と図書館への言及

「図書館の視察は、一年単位で数えるとかかなりの回数がある。味岡市の市議会議員はもちろん、県議会議員や味岡市以外の議員、役所の担当者、司書、学校の先生といった人たちが、図書館を見学に来るのだ」(p.104) という事情が紹介され、市議会議員の視察に対応する司書の姿が描写されている。

○松島先生

視察にやってきた市議のひとり、松島先生は「選挙のとき、図書館の予算を削減して、その予算を小中学校での英会話の指導やタブレット PC の購入に充てるべきだと主張」し、予算はついたが、アクセス制限のため「授業で必要なサイトがほとんど見られない」「タブレット PC は倉庫に積まれたまま」(p.104) というエピソードが紹介される。

館内では、「図書館の近況について」「図書館の運営方針や館の特徴、議会と図書館の連携」「利用者の数、本の貸出数、新規に購入した本の NDC 分類ごとの冊数」「よく利用される

タイトル。実施したイベントの内容とその来訪者数。分館や学校図書館との連携事業」(pp.106-107) などについて、智香さんが説明していく。AV コーナーで、松島先生は、最近の映画が入ってない、ことを指摘するが、こちらでは、麻美さんが「『視聴覚資料は娯楽のための映画というよりも、教育や学習の観点で必要なものを買ったり、映画なども図書資料との関係や、資料保存の観点を踏まえたりしながら収集しています』と説明し、利用についても、休日は席が埋まってしまうほどだという。松島先生は、古い映画は、インターネットの無料動画サイトにあるだろう、と言ったあと「『図書館なんて無料化貸本屋（注・ここだけ「無料化貸本屋」となっている）みたいなものなんだから、もっと利用者が増えるように、新しい映画をどんどん入れればいけないか』」(p.110) と主張する。

さらに「閉架書架から本を出納するための受付」で、「図書館運営センターでスタッフをしている若い女性」が「座ったまま、ブックトラックに乗せられていた本を何冊かまとめて取り出し、机の上に重ねている。そこから本を取り上げ、ばらばらと捲っている。そこに、松島先生が近づいていった。『お前、なんでサボって本なんか読んでいるんだ？ ちゃんと仕事しろ！』 静かな館内に、太い声が響いた。館内にいた利用者の視線が、いっせいに女性職員と松島先生に集まる」『まったく、司書なんてそのうち人工知能（AI）に置き換えられる仕事なんだし、サボっているのならどんどん減らしていけばいいんだ。こんなところに無駄な金なんか使わないで、スポーツ施設を建てるとか、成績の良い部活動を支援するとか、教育予算は別のところに使えばいいんだよ』」(pp.111-112) と、市立図書館のサービスや職員について、ネガティブな見地からの発言を、視察に訪れた図書館内で、まくしたてる。

この場面で、このあと紹介する、同じ市議の春日先生は、双葉に、「『学校と図書館の連携事業』について、具体的な取り組み」を行っている自治体を質問して、説明を求め (p.112)、さらに「行政支援レファレンス」の実例について、発言を引き出していく (pp.113-116)。先ほど、センターのスタッフである若い女性が「机の上」で「本を取り上げ」「捲っていた対応については、「『図書館のスタッフはカウンターにいる時、私のような利用者が声をかけやすいように、できるだけ仕事をしないように教育されていますから。さっきのは、本の中に何か挟まっているものがないか、書き込みがされてしまっていたり、破損していたりしないかたしかめていたんでしょ』」(pp.115-116) と、実際の業務内容を把握した上で、状況を説明している。

図書館への経費支出に不満があり、利用状況や業務内容に理解が乏しい議員を登場させ、図書館に対して批判的な発言をした後で、図書館の実情を把握している議員がその事態について、フォローする、という展開になっている。

○春日先生

市議会「文教委員会の委員」(p.76) である、春日先生は、市川市立図書館が運営する地域情報のデータベースについて、同じようなものが作れないかと館長にと提案する。館長から話を聞いた麻美さんは、「『四人しかいない専従の司書と、会計年度任用職員の司書だけ』では限界で、「『これ以上仕事を増やすなら、予算を取って人を増やして頂かないと』」(pp.74-

75) と、館長に言う。春日先生は、もとは高校の校長先生から市議会議員になった人で、データベースが公開されれば、『来年度の「読書バリアフリー法」関連の対策予算を通すように、力を貸してくれる』（pp.76-77）とっており、いきなり市川市立図書館のようなものを作るのは無理でも、『できる範囲でいいと思うよ。まずは一つ、作ってみてくれないか？』（p.78）と館長は話している。

春日先生は、後日、味岡市立図書館が提案する地域連携事業「音訳ボランティアによる視聴覚資料データベースの構築」のプレゼンテーションをきいた後、『図書館司書の仕事を機械に任せられることができるなら、できる限りそうするべきだと思っています。本の貸し出しは自動貸出機を使えばいいし、簡単な調査なら人工知能でもできるようになるかもしれない。どんどんやればいいんですよ。……そのおかげで、司書は別の仕事をすることができる。より複雑なレファレンス調査や、市民の交流会の司会(ファシリテーター)、情報のコーディネイト。人と人、人と情報をつなぐ専門職としての司書の役割を果たすことに、もっと多くの時間がさけるようになると思うんです』「学校図書館との連携や、イベントの企画と司会、データベースの企画と情報の入力。司書に求められる仕事は、時代とともに変化している。今はちょうど、その過渡期なのだ』『だからね、司書が人工知能に置き換えられるなんて、そう簡単に言わせませんよ』（pp.132-133）と語っている。

◎地域情報データベース

これに関係する事例として、県立図書館が関与している、佐賀県立図書館で所蔵する「古文書、地図、絵はがき、写真、画像のデータベース」、新潟県立図書館の「郷土人物・郷土記事索引データベース」、岐阜県立図書館の「クラシック音楽など、一八〇万曲を無料で聴くことができる」例、などが紹介され、「県立の図書館は規模も予算も大きい。それに加えて、『調査研究に努めること』や、『資料及び情報を体系的に収集、整理、保存、及び提供すること』が、「重要な役割の一つとなっている」一方、「予算も働ける人数も限られている市町村立の公共図書館では」事情が異なる。郷土資料や地方行政資料の電子化に努めることは、文部省の基準にはあるが、努力義務であり、市川市立図書館のように、『私たちが何をどこまでやるのかって判断はむずかしい』（pp.81-82）と双葉はもらす。旭川市立図書館の「北方資料デジタル・ライブラリー」、岐阜県関市立図書館の「江戸前期の古文書公開」、小平市立図書館の小平市に関する「昭和五十二年以降の新聞記事検索」、調布市立図書館の「映画ポスターのデータベース」など、市立図書館が対応している具体例があげられているが、「こういうことができるのはごく一部だ」（pp.82-83）とある。

◎図書館員の住居

双葉は、体調不良で仕事を休んだ、上司である女性司書・智香さんの自宅マンションを訪問する。自ら『魔窟』と称するその部屋には、本がいたるところにあり、「あまりにも本の量が多すぎて、もはや部屋が収容できる冊数をはるかに超えてしまっているという状態。

住んでいる部屋に本が置かれているというよりも、本のためにある部屋の中に、人間が潜り込んでいるという感じだった」「父からもらって、ここに置いてある本』」もあり「国語教師だった父親が高校で司書教諭として学校図書館の運営にも携わっていたそうで、自宅にも収まりきれないほどの本があるらしい」(pp.154-156)と、描写されている。図書館員＝大量に本を所有している人、という、ある意味で昔からあるイメージ通りの「図書館員の住居の実態」であることが紹介されている。

◎特別整理期間

双葉は、中学時代の同級生が本を返却ポストに入れようとしているところに出会い、『来週から、十日間まるまる休館になるんでしょ?』『いいよねえ……司書って楽で。今どき、十連休が取れる仕事なんて、他にないよ』(pp.11-12)と言われる。翌日、図書館で『特別整理期間なんて、忙しくてむしろ十日間ぜんぶ出勤で休めないくらいなのに、それで楽をしてみたいと言われるのはさすがに納得いかないです』(p.13)と、双葉は話している。図書館の仕事が、外部から見て、ラクそうでヒマ、に見えることについて、相変わらずそのように見られている、という事例のエピソードが挿入されている。

◎自習室と共同学習室

「十二月は、自習室の利用率が高く」なり、期末試験の勉強をする、中学生・高校生の利用が多いことが紹介される。一方、「この頃の中学校や高校では、調べものをしてみんなの前で発表するような形式の授業が増えているそうだ。高校生がスマートフォンを使ってパワーポイントの資料を作っているというのも、めずらしくなくなった。学校の授業ではそのままプロジェクターにつないで、プレゼンをするのだという」「共同学習室は自習室と違って話をしても良いことになっているので、にぎやかな声が響いている。こういう授業が行われているときには、図書館は周りにいくらでも資料があるので、施設として持っている力をいちばん発揮できる。それに、学校図書館では資料がどうしても足りないのも、こういう学習内容にはほとんど対応できない」「最近ではインターネットで簡単に拾える情報だけでは発表にならないという考え方をする先生が増えてきた。インターネットを見るときは仮説を立てるのに使って、それを検証する過程は自分たちで考えたり、図書館で調べたりするようになるとの課題が出されているということだ」(pp.98-99)というように、図書館＝自習の場、という利用のされ方は今でもあるが、学習形態の変化に対応して、その準備のために図書館が使われるようになってきていることを示す具体的な実例をあげている。

先にあげた例のように、従来の、図書館のイメージがまだ残っていることを示すエピソードを示す一方で、図書館を活用した新たな学習形態が登場し、それに対応した利用形態が生まれていることも、紹介されている。

これらの他にも、「寄贈図書への対応」(pp.144-147)、「企画展示とそれに関するイベントの実施」(pp.186-198)など、図書館を利用しているだけの利用者がわからずは、見えにく

い図書館の専門職である司書の業務内容が、具体的な業務に対応する様子をふまえて、くわしく描写されている。

◎市立図書館の今後の方向性

物語のさいご場面で、双葉は、「今の図書館は、『知識と情報の行き交う場所』として再定義がすすんでいるでしょう？ 市民がパソコンを使って情報を調べたり、よりたしかかな情報に触れられたりするように手助けをすることが多いから。本をめぐるやりとりや、利用者とのコミュニケーションを重視するような考え方は、一世代前……もしかすると、二世代くらい前の図書館学で強調されていたことじゃない」と語っており、それに対して、智香さんは「今の図書館はたしかに、『知識と情報の行き交う場所』であることが求められているのかもしれない。でも、同時に図書館は、こうして『人と人とが出会う場』であり、『本を通じて、かつて生きていた人と、今生きている人とが出会う場』でもあってほしい」(pp.199-200) と話している。

◎おわりに

巻末の「おわりに」で、監修を担当している、小曾川真貴は、「おそらく今年出版される本の頻出フレーズだと思いますが、私も前回の本が出た頃には、まさかこんな未来が待っているとは想像もしていませんでした」と、直接利用停止期間の活動に触れ、「人と人とが情報を交換する場所」であった図書館が、「集まらない」「交流できない」状況になったことで、「利用条件が変わることにより、従来「弱かった」部分のサービスが（遅まきながら）強化されていくのではないか、というかすかな期待もあります」(pp.205-206) と述べている。

注)

1)大橋崇行・著、小曾川真貴・監修、こよいみつぎ・イラスト『司書のお仕事 お探しの本は何ですか？』勉誠出版、2018

大橋崇行・著、小曾川真貴・監修、こよいみつぎ・イラスト『司書のお仕事2 本との出会い届けます』勉誠出版、2020

2)手元にある、本書(2020年11月5日初版発行)では、『公共図書館の任務と目標』(p.182)というコラムタイトルになっているが、引用先として、示されている「日本図書館協会」のホームページでは「公立図書館の任務と目標」と、表示されている。

「公立図書館の任務と目標」日本図書館協会

<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/236/Default.aspx>

3)「歳が同じ」「よく話をするようになった」(『司書のお仕事 お探しの本は何ですか？』p.30)と、前作では、紹介されていた。

4)先に紹介した、「コラム」の「派遣職員と委託業務」(pp.32-33)では、「派遣」と「委託」の違い、だけでなく「偽装請負」「指定管理者制度」についても説明されている。

「図書館で司書として働くには」(pp.70-72)では、「正規職員」と「非正規職員」について、館種別に説明があり、「勤務地」「働く部署」「待遇」の「すべてを満たす場所に就職するにはかなりの幸運が必要」とされているが、「会計年度任用職員」には、ふれていない。

なお、「図書館で司書として働くには」(pp.70-72)の中で、「学校図書館の正規職員では、まず教員に採用され、そこから『図書担当』になる方法もありますが、この場合は『教員免許』に加えて『司書教諭』の資格が必要です」と説明されている。これは、「司書教諭」資格を所持している教諭が、「司書教諭」として発令されることを想定しているのかと思えるが、それは「正規(雇用)」ではあっても、「正規職員」と言うのは紛らわしく思える。小中高校で、クラス担任や教科担任をしている教員のデスクが置かれた部屋を「職員室」と称するケースが多いのは事実だが。また、この「図書館で司書として働くには」(pp.70-72)の中では、「学校司書」には、言及されていない。

本文中では、「六十代くらいに見える男性」(p.172)の「守山さん」という「『もともとは学校の先生をされていた方で、今はお住まいの自治体で、非常勤の学校司書をしている』」(p.176)人物が登場し、図書を寄贈するストーリーが描かれているが、学校司書としての学校図書館における具体的な業務内容については、ふれられていない。

4. 2020年の図書館小説

2020年の図書館は、現実には、コロナウイルスの影響で、「緊急事態宣言」が発出されると、休館せざるをえなくなったところも多く、「宣言」の解除後においては、開館しても、座席数を減らしたり、AV視聴コーナーを利用中止にするなど、サービスの一部制限が実施され、2021年になっても、そのような状況が継続している。そうした中で、2020年に発表された、図書館を舞台にした小説の事例を、公共図書館・学校図書館、それぞれについて、取り上げて、検討した。

4-1. 『お探し物は図書室まで』

『お探し物は図書室まで』は、小学校に併設された「コミュニティハウスの図書室」を舞台とするストーリーで、著者の青山美智子は、同書の「奥付」のページで「一九七〇年生まれ、愛知県出身。横浜市在住」「シドニーの日系新聞社で記者として勤務」「帰国、状況。出版社で雑誌編集者を経て執筆活動に入る」「第28回パレットノベル大賞佳作受賞。デビュー作『木曜日にはココアを』が第1回宮崎本大賞を受賞」と紹介されている。1)

◎コミュニティハウスの図書室

この小説は、一章から五章まで、それぞれ、異なる背景をもった利用者が、図書室で、レファレンスカウンターを訪れ、そこで司書の「小町さゆり」さんに、「何をお探し?」と訊ねられて、自らの質問した内容に直接関連のある本と、一見、無関係に見えてもそれぞれの

状況の改善に関係すると思われる本を紹介してもらおうとともに、「付録」として、小町さんが羊毛フェルトで作成したものをプレゼントされ、後日、本の返却とともに、小町さんのアドバイスに感謝する、というエピソードがつみかさねられていくストーリーである。

その舞台となるのは、コミュニティハウスの図書室で、「羽鳥区」にある「羽鳥コミュニティハウス」は、小学校に併設され、講座などが開催されている。そのコミュニティハウスの中の図書室は、一階の一番奥にあり、給湯室の隣で、入り口上部の壁に「図書室」と書かれたプレートが設置されている。教室ひとつ分くらいの大きさの部屋に、本棚が建ち並んで、入ってすぐ左手がカウンターになっていた。隅に「貸出・返却」というプレートが置いてある (pp.19-20)。「小学校にくっついてる施設だから子ども向けが多いのかと思いきや、普通の図書館と遜色なく品ぞろえ」(p.74) がなされているが、「新刊を扱う書店とは違う、時間の澱が積もったような空気。区立図書館よりもコンパクトなスペース」(p.189) などと描写されている。

この図書室を担当しているのは、二人の女性職員である。

◎森永のぞみ

「紺色のエプロンをかけた小柄な女の子が、カウンター前の棚に文庫本を戻している」(p.20) と描写されているのが、この図書室の職員のひとりである「森永のぞみ」で、「文庫数冊を手を持ったまま、閲覧テーブルのわきを通り、壁際の大きな本棚に案内してくれた」という対応の後『レファレンスが必要でしたら、司書がいますので奥にどうぞ』『レファレンス?』『はい。どんな本をお求めかご相談いただければ、お調べします』(pp.20-21) と、レファレンスカウンターを案内している。

また、「起業とか経営の本って、どんなのがありますか」と訊ねられた際には、「女の子は大きな目をくりっと動かした。まだ十代じゃないだろうか』『えっと、えっと……。ビジネス書かな。でも、経営者の自伝とかも役に立つし』」と言って、質問した方が「ネームホルダーに『森永のぞみ』とある。けんめいに考えてくれる彼女に申し訳なくなって、僕は『あ、大丈夫です』と片手を振った。のぞみちゃんは真っ赤な顔で言う。『すみません。私、まだまだ司書の勉強中で。奥のレファレンスコーナーにベテランの司書がいますので、そちらでどうぞ』(p.74) という対応をしている。また、『私はまだ勉強中で、高卒なので、司書になるためには三年の実務経験が必要なんです。まだ一年目だからがんばらないと』(p.131) と言っている。

彼女は、小学校の頃、一時的に教室に入ることができなくなって、「保健室登校」だった時期があり、そのときの養護教諭が、現在は、この図書室の司書である「小町さゆり」さんだった。彼女が書いた読書感想文を、小町さんがすごくおもしろかったよ、と言ってくれたことがあり、そのあと、時間をかけて教室に戻れるようになっていった。『私が高校のときに小町さんはここで司書の仕事を始めたんだけど、卒業したら私も司書になりたいって相

談したら、ここで司書補として働くことを勧めてくれたんです』『司書補講習を受けて、司書補として二年勤務すると、司書講習を受けることができるんです』『高卒の場合は、三カ月の司書講習を受けて、通算三年以上の司書補経験を積んでやっと終了なんです。大学進学して必要な科目を取って資格取得するという道もあるけど、うちは経済的に進学は難しかったし、私もすぐに現場で働きたかったから』(pp. 214-216) という事情で、森永のぞみは、この図書室で働いている。

◎小町さゆり

「図書室の奥を見ると、ついたてがあった。その向こうの天井に「レファレンス」というプレートが吊り下がっている」(pp.21-22) という「レファレンスコーナー」にいるのが、もう一人の職員「小町さゆり」さん、である。この施設で、掃除を担当している室井さんによれば、『さゆりちゃん』は『四十七歳』(pp211-212)、とのことである。

森永のぞみは、『小町さんって、私が小学生のころ養護の先生だったんです』と言っていたが、利用者からの問いかけに対しては、『うん。もともと、最初は図書館司書だったの。そのあと学校に入りなおして養護教諭になって。で、司書に戻った感じ』『どうして転職に次ぐ転職を?』『そのときに一番やりたいことを、流れに合わせて一番やれる形で考えていったら、そうだった。自分の意思とは別のところで、状況は刻々と移りゆくからね』(p.165) というやりとりがあり、小町さゆりさんは、図書館司書と養護教諭のキャリアを積み重ねてきていることが示されている。

小町さんの外見については、各章で、次のように記述されている。

「ものすごく……ものすごく大きな女の人だった。太っているというより大きいのだ。その姿は穴で冬ごもりしている白熊を思わせた」(p.22)

「そこに座っていたのは、とてつもなく大きな女の人だった。はちきれそうな体の上に、顎のない頭が載っている。ベージュのエプロンに、目の粗いアイボリーのカーディガン。肌も白く服も白く、『ゴーストバスターズ』に出てくるマシュマロマンみたいだ」(p.75)

「カウンターの中に、白くて大きな女の人があった。年齢はよくわからないが五十歳ぐらいか。特注なのか、海外のビッグサイズなのか、来ている白い長そでシャツはおそらくそのあたりで普通に売ってはいないだろう」「なんとというか、ディズニーアニメの『ベイマックス』みたいだった」(p. 134)

「おっかない表情のばかでかいおばさんがカウンターの中できつきつになって身をしずめているだけだった」『早乙女玄馬のパンダみたいな人』(p.190)

「そこにいたのは、何とも大きな女性だった。前開きの白いシャツははちきれんばかりで、ボタンが飛んでしまいそうなくらいだ」「彼女自身も色白で、正月に神社に飾られる巨大な鏡餅のようだった」(p.251)

など、レファレンスカウンターを訪れた利用者にとっては、「白熊」「マシュマロマン」「ベイマックス」「早乙女玄馬」「鏡餅」という形容のように、かなり特異な外観の持ち主と感じ

られていた。

◎「何をお探し？」

各章で、レファレンスカウンターに赴いた図書室の利用者は、それぞれに、悩みを抱えていて、司書の小町さゆりさんに、自ら相談したテーマに関係のある本にくわえて、一見、何の関係もなさそうに見えるものの、現在の状況から脱却する方向性を暗示していると考えられる本を紹介してもらう。

総合スーパーで婦人服売り場に勤務していて、転職を考えている 24 歳の女性は、『何をお探し？』「その声に捕らえられた。抑揚のない言い方なのに、くるむような温かみがあって、私は去りかけた足を止めた。にこりともしない小町さんから発せられるその言葉は、どっしりとしたふしぎな安心感があった」「私が探しているのは。仕事をする目的とか、自分に何ができるのかとか、そういうこと。でもそんなこと、司書の小町さんに話したってきっと答えてなんかももらえない。彼女がそういう意味で言ってるんじゃないってことくらい、わかっている。『……あの……パソコンの使い方が載っている本を』…」(p.23) と考えて発言しており、今の仕事にやりがいや目的を見つけれず、転職サイトに登録しようと思っていると、『まあ、動機はどうあれ、新しいことを学ぼうっていう姿勢はいいと思うよ』と言って、小町さんはパソコンに向かい、つ、とキーボードに両手を置いた。そして、しゅたたたたたっとものすごいスピードでキーを打った。目にもとまらぬ速さで、私は腰を抜かしそうになった」が、エクセルに関する本四冊と『ぐりとぐら』を紹介される。付録は、羊毛フェルトの「フライパン」だった。パソコン本の棚に行って、わかりやすそうなものを二冊選び、「二冊のパソコンガイドと『ぐりとぐら』を「保険証で貸出カードを作って」(pp.26-28) 借りる。

家具メーカーの経理の仕事をしているが、いつか、雑貨屋を開業したいと思っている 35 歳の男性は、『何をお探し？』「思いがけず、やさしい声だった」「何を探してるかって……もてあましてる夢の置き場かもしれない」(p.75) と考える。「『あの……起業の本とか、ありますか』『きぎょう』、と小町さんは繰り返した」「『あと、上手な会社の辞め方とか……』『起業にも、いろいろあるよね。なにをしたいの』『いつか、雑貨屋をやりたいんです。アンティークの』『いつか』小町さんはまた、そこだけ復唱した」(p.76)。「『でも、夢の先を知りたいと思ったのなら、知るべきだ』小町さんはずっと姿勢を正し、パソコンに向かった。キーボードの上で一秒手を止め、次の瞬間、指が見えないくらいのハイスピードでキーを打っていく。意表を突かれて、僕はあぐりと口を開けてしまった」。起業の本が三冊、並んだリストの最後に、違和感のあるタイトル『英国王立園芸協会とたのしむ 植物のふしぎ』があった。付録として、茶色い体に黒い縞があり、横たわって眠るキジトラ猫、の羊毛フェルトを受け取る。いっしょに行った女性が区民で、カードを作ってもらい、起業関係の本は

棚にもどして、四番目の本だけ借りる (pp.77-79)。

出版社に勤務して雑誌編集の仕事をしていた、40歳の女性は、妊娠した後、産休・育休を経て、会社に復帰したが、資料部への異動を告げられる。子どもが小さいので、育児には想定外のことが多いが、2歳の子どもといっしょにコミュニティハウス図書室を訪れて、『何をお探し?』ふわん、と体を包まれたような気がした。ふしぎな声だった。親切でもなく明るくもない、フラットな低音。なのに、身も心もゆだねたくなるような、懐の深さを感じられるひとことだった。何を探しているのかと問われれば、たくさんある気がした。これからの私の生きる道は? このもやもやの解決手段は? 育児に必要な「余裕」とやらは? どこにありますか、そんなもの。でも、ここはカウンセリングルームではない。私は、『絵本を』と、それだけ伝える。「小町さんは平淡に言った。『絵本。それはそれは、たくさんあるよ』『二歳の娘向けに、なにか。娘は『はだしのゲロブ』、気に入ってました』と言うと、小町さんは体をゆすって唸る。『ああ、あれは名作』」「小町さんはずっと姿勢を正し、キーボードの上に両手を置いた。そしてばばばばばばばつともものすごい速さでキーを打った。指だけが機械になったみたいだった。あっけにとられてその姿を見ていると、小町さんが最後の一手をぱーんと打つ。次の瞬間にプリンターがカタカタ動き出した」(pp.135-136)そして、絵本を三冊と『月のとびら』。著者は石井ゆかり」を紹介され、「石井ゆかりさんなら知っている。毎日の星占いをSNSにアップしている人だ」と思う。羊毛フェルトは、「青い球体に、緑色や黄色のまだらの模様がある。……地球?『あなたへの付録』」(p.139)と小町さんに言われ、それを受け取る。この女性は、紹介された絵本三冊と『はだしのゲロブ』と『月のとびら』の五冊を借りている (pp.141-142)。2)

おじさんがやっていたマンガ喫茶を訪れるうちに、絵が好きになり、イラストの勉強をして、高校卒業後はデザイン学校に進んだが、就職はうまくいかず、今、現在はニートの状態が続いている、30歳の男性は、『何をお探し?』深みのある低い声で訊ねられ、真っ先に浮かんだ言葉に自分でびっくりした。そのことに不意を突かれて、涙がぼろっと出る。俺が探してるのは……ああ、そうなんだ、探してるのは」と思い、その後は、小町さんと好きな漫画の話をする。「俺がどんなタイトルを挙げて、小町さんにはちゃんと通じた。彼女は決してペラペラと饒舌ではなかったけど、手元ではぬいぐるみを作りながら少ない言葉でぴしりと的を射たコメントをくれて、俺はおおいに感動した」(pp. 191-193)。「『若いのに古い作品をよく知ってるね』『おじさんがマンガ喫茶をやって。小学生の頃、よく行ってたんです』」その後、「就職はうまくいかず、バイトをしても続かず、今現在ニートの状態が続いている」『実際に絵で食えるのなんてほんの一握りでしょ。絵だけじゃなくて、好きなことを仕事にすることができる人なんて、百人に一人もいないんじゃないですか』』と言う。「小町さんはずっと姿勢を正し、パソコンの前に向かった。そして、突然、たたたたたたたっとハイスピードでキーボードを打ち始めた」「勢いよく最後の一打ちを済ませた小町

さんは、印字された紙を一枚よこした」「紙には一行だけ、本のタイトルと著者名、棚番号が書かれていた。『ビジュアル 進化の記録 ダーウィンたちの見た世界』小町さんは、『あなたにレファレンスできる漫画は、私にはないと見た。子ども時代に読んだ漫画という財宝を超えられそうにないからね』と言ってカウンター引き出しから、小さな飛行機を、本の付録、として取り出した。『ビジュアル 進化の記録 ダーウィンたちの見た世界』という本は、「前半には長い文章のページがあり、あとは豪華な写真集のようだった」「『借りていくには重い』」と言っていると、『読みに来れば』振り返ると、小町さんが俺を見ている。『貸出中の札つけて預かっておくよ。だからいつでも、ここに読みに来れば？』『隅々まで読むと、けっこうかかるよ』(pp. 197-198) と言う。

このケースでは、小町さんは『あなたにレファレンスできる漫画は、私にはないと見た』と言って、『ビジュアル 進化の記録 ダーウィンたちの見た世界』の一冊だけ、紹介している。なお、最初のインタビューの場面では、「探しているもの」が何かは、示されないが、のちに、『何をお探し？』小町さんにそう聞かれたときに、真っ先に浮かんだ答えは「俺の存在を許してくれる安らかな『居場所』」(p. 221) であったことが示される。

会社を定年退職し、今後の生き方を考えている65歳の男性は、レファレンスカウンターの司書の手元に、自分が勤めていた会社で作っている洋菓子「ハニードーム」の箱が置かれているのを見つける。『何をお探し？』その声は思いがけず穏やかで凜としていて、体の奥まで響いてきた。わたしは何を探しているのだろう。これからの……人生の在り方を？」と感じたが、実際には、『囲碁の本を、ちょっと』と話すとき、小町さんは『囲碁って奥が深いですよ』(pp. 251-252) とこたえた。「小町さんに、心のうちをそっと打ち明けたいな。『わたしの会社人間にとって、定年退職というのは社会から退いたということなんだと実感しています。会社員をしていたころはゆっくり休んでみたいと思うこともあったけど、実際に時間ができたら何をすればいいのかわからなくて。残りの人生が、意味のないものに思えてね』小町さんは眉毛ひとつ動かさず、穏やかに言った。『残り、とは？』わたしは自問する。残りとは。『残りもの、かな。あまりものというか』」「『十二個入りのハニードームを十個食べたとして』」「『そのとき、箱の中にある二つは「残りもの」なんですか』」「すぐに声が出なかった。小町さんが投げかけた問いは、核心をついている気がした。しかしそれに対する答えを、わたしはうまく言葉に置き換えられない」「小町さんはすっと背筋を伸ばしてパソコンの前に座りなおした。ピアノを弾き始めるかのように、キーボードにそっと両手を置く。そして、ずだだだだだだだだだあつと、小町さんは驚異的な速さでキーを打った。むくむくした指がどうしてそんなにスピーディーに動くのか不思議だった」「小町さんは、ぱあんと勢いよく最後の一手を打つ。とたんにプリンターがかたかた動き出し、紙が一枚出てきた」その紙には、囲碁の本が三冊と『げんげと蛙』(ジュニアポエム双書20)、のタイトルと著者、棚番号、などが印刷されていた。付録の羊毛フェルトは、四角い体に小さなふたつのハサミのついたカニだった (pp. 255-257)。本を借りるが、囲碁

の本よりも『げんげと蛙』を読んで「詩の鑑賞」に興味を惹かれる。その後、本の返却に図書室を訪れた際には「『小町さん、言ってたでしょう。十二個入りのハニードームを十個食べたとして、箱の中にある二つは「残りもの」なんですか。わたしはその答えがわかったみたいです』『箱の中にあるふたつは、ひとつめに食べたハニードームと何も変わらない。どのハニードームも、等しく素晴らしい』」(pp. 294-295) と話している。

◎付録を選ぶ意味

レファレンスカウンターで、小町さんに「何を、お探し？」と尋ねられた、それぞれの利用者は、探しているものとして、自分の現状と関係のある「パソコンの使い方が載ってる本」「起業の本・上手な会社の辞め方」「絵本」「囲碁の本」をあげる。小町さんは、それぞれに該当する本とあわせて、一見、何の関係もなさそうに見えるものの、いまの状況から変わっていくための方向性を暗示していると考えられる本：一冊、が載ったリストを手渡し、(30歳のニートの男性には「『あなたにレファレンスできる漫画は、私にはない』」と言って『ビジュアル 進化の記録 ダーウィンたちの見た世界』の一冊だけを紹介している) それとともに、羊毛フェルトの付録を手渡ししている。こうした対応から、小町さんは、本に関する知識とあわせて、一種のカウンセラー的な洞察力をもっているように感じられる。

羊毛フェルトの付録を、どうやって選んでいるか、について聞かれ、「選書に関しては、この利用者にはこれがふさわしいと、小町さんの長年の経験や勘からくるものがあるのだろう」「なにかとんでもない秘儀があるのではと期待したが、小町さんはこともなげに答えた」「『てきとう』『カッコいい言い方をするなら、インスピレーション』『それがあなたをどこかと通じさせることができたのなら、それはよかった。とても、よかったです』『私何かわかっているわけでも、与えているわけでもない。皆さん、私が差し上げた付録の意味をご自分で探し当ててくれるんです。本も、そうなの。作り手の狙いとは関係のないところで、そこに書かれた幾ばくかの言葉を、読んだ人が自分自身に紐づけてその人だけの何かを得るんです』」(pp. 295-296) と小町さんは、語っている。

注)

1) 青山美智子『お探し物は図書室まで』ポプラ社、2020

巻末には「作中に出てきた実在する本」が12点、「参考文献」が2点、あげられている。

2) 『はだしのゲロプ』は、巻末の「作中に出てきた実在する本」のリストにはなく、架空の存在と思われる。

『月のとびら』については、出版社のホームページで「石井ゆかりが、月の世界を入りに『占いとどうつきあえばいいのか』を内側から考えました」「夢の時間を大切にしつつ、自分の手に自分の時間を取り戻すために読みたい一冊」と紹介されている。

<http://books.cccmh.co.jp/list/detail/1307/>

4-2. 『教室に並んだ背表紙』

『教室に並んだ背表紙』は、学校図書館を舞台に、女子中学生の日常を描いた物語で、六つの作品からなる、連作短編集である。著者の「相沢紗呼」については、巻末で「あいざわ さこ ・ 一九八三年、埼玉県生まれ。二〇〇九年『午前零時のサンドリヨン』で第一九回 鮎川哲也賞を受賞し、デビュー」と記載されている。1)

同書の末尾に掲載されている、相沢紗呼『雨の降る日は学校に行かない』の「出版広告」では、「保健室登校をしているナツとサエ」「学校生活に息苦しさを感じている女子中学生の憂鬱と、かすかな希望を描き出す六つの物語」と紹介されているが、『教室に並んだ背表紙』でも、まさに「学校生活に息苦しさを感じている女子中学生」と、学校図書館との関係性が、図書室の担当者との交流とともに、描写されている。

◎第2話「しおりを滲ませて、めくる先」の設定

『教室に並んだ背表紙』は、6作品からなる連作短編集だが、その中で、2番目に置かれている「しおりを滲ませて、めくる先」のみ、設定が異なっている。

このストーリーの舞台となる図書室は、「校舎の裏側にあつて、電灯も点いていない薄暗い廊下の先に、その隠れ家はひっそりと佇んでいた。傾いたプレートには、かすれた文字でただ一言、こう記されている。図書室。電灯が故障した室内は薄暗く、扉を開けたとたんに埃とかびの臭いが鼻をつく。並んだ書架たちはひっそりと佇んでいて、傍らに落ちた影にはなにか得体の知れない怪物でも隠れていそうな雰囲気か漂っていた。書架からあふれた書物がテーブルや床に堆く積まれていて、ファンタジーの漫画に出てくるみたくない崩壊した塔を乱立させている。誰もそれを片づけようとししないのかもしれない。ここはまるで墓場だった」(p.43)と描写されており、ほとんど利用者もおらず、ひどい状況にあった。

この物語の主要人物である、女子中学生「真汐凜奈」は、「この場所は、なんだか死んでる感じがする。もちろん、こんなところを訪れる生徒は、わたしくらいのものだった」「図書委員なんて名ばかりのもので、仕事はしなくていいことになっている。管理している増田先生に、とにかくやる気がないのだ。学校のすぐ近くに大きくて綺麗な市立図書館があるから、みんなもあまり不便に感じていないと思う」(pp.43-44)と感じていた。

「ここでなら、誰からも変な目で見られることはない。グループからあぶれてしまうことも、お弁当じゃないなんてかわいそうとささやかれることも、あの子はズル休みばかりしていると、そう嗤われることもない」と、凜奈は、サンドイッチをもってきて「いつものように、ここへ避難して、お昼を食べて、漫画を読んで時間を潰し、安息の時間を満喫していく」ことを考えていたが、そこで「なにか、音がした。重たいものが崩れるような音だった」「人がうめくような声が、きこえてくる」「現れたのは、女の人だった」「見たことのない女の人だ。年齢は、けっこう若く見える。たぶん、二十代とか、三十代とか、それくらい」(pp.44-46)と、この図書室に新たな担当者が配されたことが示される。「塚本詩織」と自ら名乗ったこの女性は、「なにを隠そう、この学校にやって来た司書なのです」(p.47)と言った。

図書委員であった真汐凜奈は、「司書と名乗った彼女を、先生と呼ぶべきなのかどうかよくわからない」と感じたが、塚本詩織は、『今年度から、この図書館のお世話をさせてもらうことになったの。ほら、ここって、ぜんぜん人の手が入ってないでしょう。電灯だって壊れちゃってるみたいだし、こんなんじゃ、ここにある本が可哀想だよ。みんなだって、本と接する機会が遠のいちゃう。そんなの、すごくもったいないじゃない』と言って、書架の整理をし、司書室を片づけていたら、ダンボール箱を崩してしまったという。

凜奈は、『司書なんかいなくても、誰も困ってなかったし』と言うが、『学校の図書室には、きちんと本の面倒を見られる人にもいらましようって、そういうルールがあったのね。今年から、それをきちんと守らないとだめになったんだ』それでやってきたのがわたしなのです、と塚本先生は再び胸を反らして言った」(p.49)。図書委員の凜奈は、塚本先生の仕事を手伝うようになり、「先生はこの学校に来るまで、よその中学校で働いていたのだという。図書室を管理するだけじゃなくて、担任としてクラスを受け持っていたらしい。こう見えても国語の先生の資格があるんだよ、と彼女は誇らしげに顎を上げて言う。本年度は司書の仕事に集中するため、授業を受け持つことはないらしいけれど、彼女のことを先生と呼ぶのは間違いではなかったのだ」(p.60)という事情であると聞かされる。2)塚本詩織先生は、段ボール箱に不要な本を詰めながら、図書室の書架には限りがあって、新しい本を入れようとする、どうしてもあふれて廃棄しなくてはならない本が出てくるのだと言いながら、古い書架の前に立って、不要な本を選別していく(p.65)。

やがて、図書室の状況は改善されていき、「吸血鬼が住んでいた墓地は、いつの間にか徹底的に浄化されてしまっていた。その名残を微塵も残さず本は書架に美しく整列して、詩織先生の掲示物がいたるところを華やかに彩っている」(p.79)。凜奈は、図書委員として、塚本先生から、『せんせー、これどうやるのー』カウンターの奥で、ブッカーがけの作業をしていた女の子が声をあげる。忙しそうに司書室へ籠っているらしい詩織先生が、それに応えた。『凜奈ちゃんに訊いて一つ』とことごと、一年生の女の子が近づいてくるのを、私は待ち受ける。『真汐先輩、ちょっと教えてほしいんですけど』(p.79)というように、後輩の図書委員の指導も任せられるようになる。

この物語で、中学校の図書室の担当者は「塚本詩織先生」であり「司書と名乗」っては、いるが、「よその中学校で」は、「担任としてクラスを受け持つ」いて、「国語の先生の資格がある」が「本年度は司書の仕事に集中するため、授業を受け持つことはない」という人物である。この人物が、「室内は薄暗く」「埃とかびの臭いが鼻をつく」「得体の知れない怪物でも隠れていそうな雰囲気」「まるで墓場」のような「図書室」の状況を変えていき、中学生だった「真汐凜奈」は、お昼にサンドイッチを食べるときぐらいしか利用していなかった図書室が、変わっていく過程に、図書委員としてかかわっていく。

◎司書の「しおり先生」

「真汐凜奈」が、「しおり先生」として、他の5編の物語の舞台となる、学校図書館の担

当事者として、ストーリーに登場している。

「しおり先生」という呼ばれ方については、『先生って、なんでしおり先生って呼ばれるの。葉をくれるから?』「先生の名前は、詩織でもなければ、葉でもない」『名前の真ん中に、あるでしょう。しおりって。昔、図書委員の子に葉をあげたら、それであだ名をつけられちゃって』『名前の真ん中?』「わたしは、先生が差し出した名刺にある名前を、じっと見つめた。真汐凜奈。ましお、りんな。ま、しおり、んな。なるほど、それでしおり先生か」(pp.286-287)という事情があかされている。

しおり先生は、生徒のひとりに『先生だって、子どもの頃は引っ込み思案だったんだから。教室に居場所がないように感じちゃって、いつも図書室にこもって、漫画ばかり読んでた』(pp.157-158)と語り、それは、先に見た「しおりを滲ませて、めくる先」において、教室ではなく図書室で「お昼を食べて、漫画を読んで時間を潰し」(p.45)でいたという、真汐凜奈の中学生のときの行動と一致している。

その外見やイメージについては、たとえば「若くてきれいめな先生で、たぶん見かけたら忘れないはずなのに、ぜんぜん見覚えがない。大きな黒縁の眼鏡を掛けていて、それが小さい顔によく似合っている」「地味な服装」「メイクが自然ですごくうまい」「図書室には、親しみやすい司書の先生がいるって、女子たちが噂していたのを思い出した」「名前は、確か、しおり先生——って呼ばれていた気がする」(pp.98-99)と表現されている。

先の「塚本詩織先生」は、『この学校にやって来た司書なのです』(p.47)と名乗っていたが、「よその中学校で」は「担任としてクラスを受け持って」いて「国語の先生の資格がある」(p.60)と語っている。一方、「しおり先生」は、『わたしはね、正確には先生じゃないもの。学校司書だから』(p.103)『先生は、司書ですから』(p.202)『読んでみたい物語を言ってみて。先生、見つけられるから』『本当に?』『学校司書ですから』(pp.239-240)などと発言しており、学校内での位置づけは、「学校司書」とされているのかと思われる。ただ、たとえば、生徒からはみれば「たぶん、図書室の先生かなにかなんだろう。そういえば、しおり先生っていう司書の人があるって、聞いたことがある」(p.229)のように、「図書室の先生」と表現されることもあり、先の「塚本詩織先生」も、「本年度は司書の仕事に集中するため、授業を受け持つことはないらしいけれど、彼女のことを先生と呼ぶのは間違いではなかったのだ」(p.60)という呼ばれ方をされることもあって、その違いが強調されているわけではない。

◎学校の図書室と「しおり先生」

「一階の校舎の奥、立ち入り禁止なのではないかと疑ってしまいそうなくらい、人の声のしない廊下に辿り着いた」「いちばん奥にある部屋のプレートに書かれた文字を見る。図書室、と書いてある」「図書室は、静かだった。どっしりとした書架がたくさん並んでいて大きなテーブルがあるのも見える。ちらほらと、知らない生徒たちの姿が見えた。みんな、勉強をしたり本を読んだりしている」(pp.227-228)といったように、図書室の状況が描写さ

れていて、「静か」だが「生徒たちの姿」があり、「勉強をしたり本を読んだり」している。

「しおりを滲ませて、めくる先」にあったような「室内は薄暗く」「書架からあふれた書物がテーブルや床に堆く積まれ」「まるで墓場」(p.43)といった状況とは、異なっている。

たとえば、「図書室に入ってすぐ、受付の近くにあるこの小さな書架には、色とりどりの文庫本が収まっている。中学生に読んでもらいたい小説を、しおり先生が選んだものみたい。どれも読みやすく、十代の子たちが主人公だから共感しやすいと評判だ」(p.7)「せめて生徒に読んでもらう本は、面白くて親しみやすいものということで、何冊かはしおり先生が選んでいるようだ。しおり先生の選書は間違いがないので、わたしは課題図書の中から三冊を読んでみた。どれも面白くて、しおり先生が選んだものに間違いがないと確信が持てるものばかり。大勢の生徒に貸し出さないといけない都合上、市内の図書館に複本が大量に用意されているものから選んでいるらしい。それでもすべてのクラスで同じ課題図書となると本が足りなくなってしまうので、選書や課題が出される時期はクラスごとに違っている」(p.136)というように、図書室の本に関して、しおり先生による配慮がいきとどいていることが感じられる描写になっている。

一方、生徒への対応については、課題図書の読書感想文に悩んで『他の子の感想文で課題を済ませようとしていた』(p.113)いた生徒には、ハードカバーの本が『文庫本になるときに、題名が変わっている』(p.116)ものを読むように誘導して、『課題図書だっと思うと、どんな感想を書いたらいいかかまえて読んじゃって、内容が頭に入ってこなくなるでしょう？ それより、すっごく面白い本だっっておススメされて読んだ方が、なにも考えずにお話を楽しめるじゃない？』(p.117)と言っている。

『二次元に恋をするって……、やっぱり、変ですか』(p.158)『本当は存在しない相手を、好きになるだなんて、ただの現実逃避みたいで』(p.160)と悩む生徒には、『たとえ架空の中であっても、そこに一人の生きている人間を見出すことができるもの』『相手がどんな存在であれ、誰かを好きになる気持ちは、きっと生き続けて、いつか他の誰かを大切にしていられるようになると思うよ』(p.161)と、はげましている。

「田中涙子(ティアラ)」というキラキラネームに悩む女子中学生には、『名前の通りに、生きる必要なんてないんだよ。先生も自分の名前の通りに生きてる自信はないもの。涙の子だからって、泣く必要はないんだから』(p.202)と言っている

「スクールカースト」に悩んで学校内に居場所を見つけられなくなり、窓から飛び降りようとした生徒には、身体にしがみついてそれを押しとどめ、「腕すら封じられるみたいに、背後から抱きしめられたまま、開いた窓に向かってうめく。『もう、おしまいだよ。あたしの人生なんて、詰んでるんだよ』『そんなことない。そんなことないんだよ』』と言って、『学校で過ごした時間で、すべてが決まってしまうなんてこと、絶対ないよ』『今という時だけですべてを決めたりしないで』『助けてよ。あたしを、助けてよ』わたしの祈りに、先生は言った。『大丈夫。先生が助ける。先生が助けるよ』(pp.275-278)と言い、そのあとは、図書室登校をすることになった、この生徒を支えている。『いつまでもいいんだよ。

無理に教室に戻る必要はないから』先生は、そう優しく笑ってくれるけれど。わたしは視線を落として、ポツリと不安を呟く」生徒に、自分の体験を話して、『「なにも気にしなくていいの。学校に行かなくても大丈夫なようにするのが、先生たち大人の役目なんだから』』『人間は、人に出会って変わることができるし、人に出会えなくても、わたしたちは物語と出会えるんだよ』』『寂しくて、迷ってしまったときは物語を読んで。きれいな言葉にふれて、想像力を育て、他人の心を理解できる人になって。そうしてやさしさをたくさん身につけて素適な大人になってね』(pp.279-283) と、この生徒に声をかけている。

「しおり先生」は、本に関して一定の知見を有していて、配慮が感じられるような図書室の描写に加えて、中学生の日常生活において、ある種のカウンセラー的な役割も果たしている状況が感じられるストーリーになっている。

◎「おすすめ教えてノート」

この「おすすめ教えてノート」とは、中学校の図書室にある「なんの変哲もないよくあるノートに、図書委員の先輩が親しみやすい文字とカラーペンで飾り付けたもの」で、「普段はカウンターに置いてあって、自分がこういう本を探してて読みたいと書くと、しおり先生や図書委員が答えてくれるようになっている。もちろん、図書室の利用者がオススメしたい本のことを書くのもオッケーで、秘やかに文字だけの交流がそこで繰り広げられている」(p.19) とあるように、読みたい本のことについて書いておくと、その内容にあった本が紹介されるというものである。

一方、先に扱った『図書室のバンラドール』は、同じく学校の図書室だが、高校の図書室を舞台としたストーリーで、こちらでも「図書室ノート」が存在する。「雑誌の棚に置かれた無地の大学ノートだ。誰でも書き込めるので、普段は雑談風の書き込みやら読んだ本にちなんだイラストやらで盛り上がっている。多少の意見の食い違いがあったとしても、みんな平和に楽しんでいたはずだ」(p.247) とあり、より幅広い内容が書き込まれている。前章で取り上げた、ビブリオバトルの提案 (p.144) も、このノートへの書き込みがきっかけとなってさまざまな検討が行われたうえで実施されている。

注)

1)相沢紗呼『教室に並んだ背表紙』集英社、2020

2)教員資格はあっても、この年度に関しては、学校図書館の業務や他の教諭との連携による図書館を活用した授業実践などに対応し、クラス担任・教科担任などは担当しない「専任司書教諭」的な待遇かと推定される。

4. 関連図書

ここまで、2020年に発表された、図書館や図書館員が描かれているストーリーを紹介し

てきたが、他に小説作品で、図書館との関連があるものについて、概要を紹介する。

『図書館の子』1)は、短編集の表題作であるが、それぞれの作品に登場するキャラクターには、特に関連性はない。夜の図書館に取り残される少年の物語で、幻想的なストーリーである。

『図書館B 2 捜査団 秘密の地下室』『図書館B 2 捜査団 人気占い師の闇』2)は、「波浜(なみはま) 図書館」の存在しないはずの「地下2階」をアジトとする「捜査団」が活躍する、講談社から出版されている『青い鳥文庫』の作品である。

『ふたご探偵5 からくり図書館の謎』3)は、翻訳作品で、「謎解きが大好きで、探偵を目指しているライラ」「手品が趣味でマジシャンを目指しているジェイク」の二人の小学生が、「学校図書館の司書の先生が消えて、いつのまにかもどってきた」ということから、「図書館を調べはじめる」というストーリーである。

『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』4)は、大手出版取次に勤める女性社員、大森理香を中心としたストーリーで、「出版取次」業界に就職した女性が、さまざまな体験を経て、成長していく状況が描かれている。先に紹介した『司書のお仕事』シリーズの「出版取次」版、といったおもむきの内容である。小説の合間には、「エピソード①～⑧」として、「兵庫県尼崎市橘にある小林書店の店主」小林由美子による、書店営業にまつわるエピソードが挿入されている。

注)

1)佐々木譲『図書館の子』光文社、2020

「図書館の子」初出『小説宝石』2019.10

佐々木譲は、「新刊記念インタビュー」において、「全体主義国家らしき国の話です。平和なタイトルとは裏腹に、将来の危うい行動が暗示される内容です」と本作品を紹介され、佐々木「これはどちらかというと、タイムループものです。吹雪の夜の図書館のイメージ、少年の前に現れた不思議な中年男との一夜」「時代も場所も明示していませんし、この短編集の中ではいちばん幻想性が強い作品かもしれません」と、こたえている。

「佐々木譲バージョン 5.0 宣言から 3 年——今なお作風の幅を広げ、時間ものSFに挑む理由とは？」『図書館の子』著書新刊記念インタビュー・佐々木譲

<https://www.bookbang.jp/review/article/634458>

2)辻堂ゆめ・作、bluemomo・絵『図書館B 2 捜査団 秘密の地下室』講談社、2020.6

辻堂ゆめ・作、bluemomo・絵『図書館B 2 捜査団 人気占い師の闇』講談社、2020.9

本作品では、漢字にはすべてルビが降られている。また、講談社『青い鳥文庫』は、新書版で刊行され、「★小学初級・中級から ★★小学中級から ★★★小学上級・中学から」に分けられているが、本作は★★とされる。

3)ペニー・ワーナー著、番由美子・訳 ヒョーゴノスケ・絵『ふたご探偵5 からくり図書館の謎』KADOKAWA、2020.8

本作品の原著作について、出版社に問い合わせたところ、「日本の読者のための書下ろしとなっております。そのため原書は海外で発売されておりません」との回答であった。

<https://www.kadokawa.co.jp/support/c/>

4)川上徹也『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』ポプラ社、2020

著者の川上徹也については、同書の巻末で「大阪阿倍野出身のコピーライター。広告代理店勤務を経て独立。2008年からはビジネス書を中心に作家活動を開始」「書店好きとして知られ、全国の書店を取材して執筆した『本屋さんで本当にあった心温まる物語』（あさ出版）などの著作もある」と紹介されている。また、同じページには、「協力 小林由美子」「兵庫県尼崎市橋にある小林書店の店主」とある。

「おわりに」（pp.264-267）では、「本書は、兵庫県尼崎市・JR立花駅北側の商店街の外れに実在する小林書店とその店主小林由美子さんをモデルにした小説です」「主人公の成長物語（ノベル）と小林さんのエピソード（ノンフィクション）を融合させた、『ノンフィクション&ノベル』ともいえる作品になっています」「『出版取次会社』の新人営業ウーマンを主人公にした物語の中で、小林さんのエピソードを紹介するという形」ととった、と記述されている。全体が、ページ付けがされている1～267ページの中で、表題紙や目次、あとがき、などを除くと、小説部分が152ページ、エピソード部分が107ページとなっている。

5. おわりに

2021年1月20日に発表された「第164回（2020年下期）芥川賞」は、『推し、燃ゆ』により、宇佐見りん（1999年生）が受賞したが、年少での受賞が話題となった。「第130回（2003年下期）芥川賞」を、現在でも、同賞の最年少受賞者である『蹴りたい背中』綿矢りさ（19歳11ヵ月で受賞）と同時に、『蛇にピアス』で受賞した、金原ひとみ（20歳5ヵ月で受賞）は、「コロナ禍時代の表現」を特集した『新潮』2020年6月号の巻頭において「アンソージャル・ディスタンス」1)を発表した。同誌の目次では「疫病が世界を席卷し、恋人達は極限の地獄と仄かな希望の狭間で揺れる」と紹介されている。金原ひとみは、『新潮』2021年1月号では、「テクノブレイク」2)を発表している。

この金原ひとみの作品は、相当数発表されていると思われる、コロナウイルスの影響下にある時代を背景とした小説の一例であり、その状況を反映したフィクションの作品が、他にも相当数、存在すると思われる。一方、今回取り上げた、2020年に発表された図書館や図書館員を描いた小説は、コロナウイルスとの関係性において、こうしたリアルな状況下での現象が扱われたものではなかった。3)

図書館は、そこに人々が来館することで利用される施設、という側面があり、2020年には、人と人との接触が抑制される事態がひんぱんに生じたことから、図書館サービスが制限されることもあった。4)今回の事態に遭遇する以前から、図書館に来館しなくても利用できるサービスの提供が、一部では実施されていたが、たとえば、電子書籍の貸出を行う図書館

の数は、目に見えて増加し、さまざまな形で、これまで以上に、来館しなくても利用できるリモートアクセスでのサービス提供が模索されている。5) そうした図書館サービス内容の変化がフィクションの作品にも反映されていくことも、今後は考えられよう。

たとえば、これまで、さまざまな事例を取り上げてきた中で、日米の図書館員の恋愛小説を比較した際、アメリカで状況については、2001年に原著が発表された作品で、「アラバマ州の小さな町の図書館長」である女性が、自ら勤務する図書館について「州民なら誰でも、どの図書館でも登録することができて、何千もの新聞や雑誌、論文や百科事典、学術資料や医学専門誌などに、家にいながらにしてオンラインアクセスできる」と、語っている。これが、2001年刊行の原著の中で紹介されている、アメリカの地方の小規模な図書館での状況なのである。6)

日本の小説では、新聞データベースやレファレンス協同データベースに言及した『襲名犯』7)などの事例があったが、今回「2. 続巻の刊行」で扱った『図書室のバシラドール』『司書のお仕事2』では、インスタグラムや地域情報データベースなど、社会基盤としてインターネットが定着していることを前提としたストーリーが展開されている。

2021年1月に公開された「カレントアウェアネス-E」に、「マンガ『夜明けの図書館』完結記念インタビュー」が掲載された。8) 「2010年11月に連載を開始した『夜明けの図書館』が、2020年11月に完結を迎えた。公共図書館でのレファレンスサービスをテーマとしたマンガであり、「暁月市立図書館」の新米司書「葵ひなこ」を主人公とし、利用者の様々な疑問・ニーズを出発点に「本と人」「人と人」をつなげていく様子が描かれている」「完結を記念して、作者の埜納タオさん、監修者として司書の立場から協力した吉田倫子さん」にインタビューを行った内容がまとめられている。この中で、吉田倫子は「守ろうと考えていたのは、作品について最後に決めるのは作者と編集者であり、私は物語が「嘘」になりそうだと思うときだけ軌道修正する「伴走者」に徹する、という一線です」と述べている。一方、作者の埜納タオは、連載の中盤以降の変化について「様々な図書館サービスを描くことで、読者に図書館の多様な側面を知って関心を持ってほしい、図書館を好きになってほしいと思っていました。正直なところ「ライトな図書館マンガ」としてスタートしたのですが、巻数を重ねるごとに、協力者の吉田さんのお力添えもあり、図書館の現場での対応や取組などのリアリティさが加わりました」と発言している。

図書館に関連のある作品が継続して発表されていく中で、図書館や図書館員への取材や、図書館関係者からの助言を取り入れることが、内容的な面で、一般の読者からはどのように受けとめられるのか。図書館関係者のがわが、知ってほしいと考える状況や、最新のサービスが、ストーリーとして、読者に歓迎されるかどうかは、別の問題であると思われる。たとえば、今回取り上げた中で、「2. 続巻の刊行」で扱った作品では、図書館をめぐる最新の状況、インターネットを含む新しい技術の活用や職員の多様な雇用形態とそこから派生する様々な問題、学校図書館担当者の雇用状況や学校図書館法改正をめぐる動向、などが、詳細に描かれている。一方、『お探し物は図書室まで』『教室に並んだ背表紙』で扱われている、

コミュニティハウス図書室や中学校の図書室で展開されるストーリーでは、従来からあるレファレンスサービスや生徒とのコミュニケーションを主とした、図書館や図書館員との関りが中心になっている。今後、たとえば、本節の冒頭で紹介したような、コロナウイルスの影響下にある図書館での物語を描写したフィクションの作品が、発表されるのか。その際に、図書館がわが考える望ましい図書館の在り方と、読者の興味・関心のゆくえは、どのように関係していくのか。

『司書のお仕事2』のあとがきで、は「人と人とが情報を交換する場所」であった図書館が、「集まらない」「交流できない」状況になったことから、「むしろ利用条件が変わることにより、従来『弱かった』部分のサービスが、(遅まきながら)強化されていくのではないか」という方向性に言及されているが、そうした変化が、フィクションの作品にどのように反映されていくのか。今後のフィクションの中の図書館については、さらに多様な可能性が考えられる時代になってきているのではないか。コロナウイルスの影響下にある状況は過酷なものであっても、希望が見いだせるような展望が開けることを期待したい。

注)

1) 「アンソージャル・ディスタンス」について、たとえば、下記の書評サイトでは、以下のように評価されている。

「今年読んだ小説から一作を選ぶとするなら、金原ひとみ「アンソージャル ディスタンス」をおいてほかにない。コロナ禍による緊急事態宣言が出ていた5月7日発売の文芸誌「新潮」6月号(新潮社)の巻頭を飾り、いち早い文学からの応答として、おそろしいほどに現実を見通していた」

「2020年の文芸界を振り返る 覆う『正しさ』、あらがう魂」『好書好日』2020.12.29
<https://book.asahi.com/article/14027315>

2) 『新潮』2021年1月号の「編集長から」では、「この時代の人間の肖像画」というタイトルで、次のように記述されている。

「2020年は新型コロナに翻弄され続けた一年だった。誌面を振り返っても、小説家の想像力が、地球規模の感染症に激しく揺さぶられたことがわかる。なかでも、鮮やかな印象を残したのが、金原ひとみ「アンソージャル・ディスタンス」(『新潮』六月号掲載)で、現代日本の生きづらさと、それを加速させるコロナ禍を背景に、恋人たちの生=旅を描いた傑作だった。その金原があらためてコロナに焦点をあてた最新作が、2021年1月号にて発表する「テクノブレイク」。COVID-19に引き裂かれ、欲望・依存・虚無に突き動かされた恋人たちの肖像画は圧巻だ」

「編集長から」『新潮』2021年1月号
<https://www.shinchosha.co.jp/mailmag/shincho/sample.html>

3) 『司書のお仕事2』の巻末、「おわりに」で、監修・小曾川真貴は、「おそらく今年出版さ

れる本の頻出フレーズだと思いますが、私も前回の本が出た頃には、まさかこんな未来が待っているとは想像もしていませんでした」として、直接利用停止期間の活動に触れているが、ストーリーの中では、コロナウイルスの話題に関連する内容はなかった。

4) 「COVID-19 による図書館の動向調査」 saveMLAK

<https://savemlak.jp/wiki/saveMLAK>

5) 電子図書館（電子書籍貸出サービス）実施図書館数 電子出版制作・流通協議会

https://aebs.or.jp/Electronic_library_introduction_record.html

6) 佐藤毅彦「女性図書館員の恋愛“解禁”小説日米事例研究 『蠍のいる森』と Open Season（翻訳タイトル『パーティー・ガール』）について—図書館はどうみられてきたか・8—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.43、2007.3、pp.59-68

7) 竹吉優輔『襲名犯』講談社、2013

8) 「マンガ『夜明けの図書館』完結記念インタビュー 協力：『夜明けの図書館』作者・埜納タオ、監修者・吉田倫子、編集・聞き手：関西館図書館協力課調査情報係「カレントアウェアネス-E No. 407」2021.01.28、国立国会図書館

（本文中で参照した web ページは、2021 年 2 月の時点で公開されていたものです）